刻-とき-の事務所

恢坐志津那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
刻ーときーの事務所

【Ｎコード】
Ｎ４７６８Ｆ

【作者名】
恢坐志津那

【あらすじ】
その事務所では、三人の人間が“探し屋”（人や物を探す職業）として働いていました。「陸斗もオーナーもそんなだから、依頼が来ないんだよ…。」降魔術と自己流護身術の使い手の少女、雪森要。「ん…売られたケンカを買っただけっすよ。」棒術と時操術の使い手、日本人と中国人のハーフの溌陸斗。「こういう日はスクラッチをやるに限る。」読心術とプラズマガンの使い手、オーナーの八代内順司。ある日、彼らの元に来た依頼は…“翡翠のルビー付きの指輪を探してほしい”というものだった…。続きは本編で（・ω・）

Ｔｉｍｅ　ｄａｙ―ある日の依頼―

刻の事務所をご存知ですか？

それは日本のどこかにあると噂されている、“探し屋”の事務所のことです。

探し屋とは…“存在するもの”なら、どんなものでも探して届けてくれる職業のことをいいます。

おや、あなたも彼らに依頼したいことがあるようですね…。

私も今から行くところですから、良ければ一緒に行きませんか？

場所なら大丈夫。私がご案内しますから。

それでは参りましょう…普通なようでちょっと変わった彼らの事務所へ……

『……っく…うっ……ひっく……。』

…河原で小さな女の子が泣いている。

『……っく…』

『何で泣いてるんだ？』

通りがかった少年が女の子に声をかけた。

『……っく……あの…っね…無くしちゃった……。』

『何を？』

『とっても……ひっく……大切な……っ……鍵……。』

女の子はそう言って川の中を指差した。

『落とし……っく…ちゃったの……。流れて……無くなっちゃった……。』

『……。』

少年は、じっと川を見つめた。

やがて、視線を女の子に戻し言った。

『…まだ見つかる場所にある。着いて来て。』

目をぱちくりさせながらも、女の子は青年に着いて歩く。

そして、少年が立ち止まった場所…川の中腹部の草むらに、女の子の探していた鍵が打ち上げられていた。

『わあ…本当に無くなってなかった…。お兄ちゃん…なんでここにあるってわかったの？』

小さな右手で鍵を拾い上げながら、女の子が尋ねる。

青年は和やかに微笑んで一言だけ答えた。

『見えたんだ…鍵がここに流れ着く瞬間が、な。』

と。

「あー…暑い……。暑い、暑い…暑すぎる…。」

日本のどこかにあると噂されている、探し屋を営む“刻の事務所”。

少女は茶色いソファに横たわり、気だるそうな声で言った。

彼女の名前は雪森　　要（ゆきもりかなめ）。この事務所の看板娘である。

瞳は黒で、茶色いパーマ髪をいつもきっちり二つに分け三つ編みにしている。

歳は17だが、学校には通っていない。

「口に出して言うな、要。…余計に暑くなってくる。」

「だって、本当に暑いんですから…。いい加減にクーラー直して下さいよ、オーナー…。」

オーナーと呼ばれたのは、ふかふかの社長椅子に座って新聞を読んでいる男性。

この事務所を設立した八代内順司（やしろうちじゅんじ）である。

紫色の瞳とボサボサの黒髪が特徴的な３０歳だ。

「直すのもタダじゃない。要が修理費払ってくれるなら、話は別だが。」

「いや…私も経済的に余裕無いから無理です。…って、そもそも…オーナーが宝くじで毎回全部使っちゃうからいけないんですよ！ほら、雑誌読んでないで陸斗も何とか言ってよ。」

陸斗と呼ばれた青年は、何だようるせーなと顔を上げた。

クセ毛だらけの緑色の髪と茶色い瞳を持つ１９歳の青年で、名字は溌（はつ）。

韓国人の父と日本人の母から生まれたハーフである。

「“何とか”…これでいいかよ？」

「……はあ。もう、いいよ…。」

陸斗の投げやりな態度に、要は諦めたように深いため息をついた。

「依頼も来ないし…暑いし…なんかもういろいろ嫌…。」

「暑いのは仕方ないが、依頼が来ないのは宣伝が足りないせいだろう。ひとっ走り行って来い、要。…俺か？俺ぁ、忙しくて手が離せないから行かないぞ。」

順司が言って、

「行ってら、要。俺もファッション雑誌読むのに忙しいから行かねえ。」

ファッション雑誌に視線を戻し、陸斗も答えた。

「あー、もう！どいつもこいつも…。いくら宣伝したって、やる気が無いんじゃ依頼が来るわけないじゃんか…。」

絶望的な声で要が嘆いたその時。

ピンポーンとチャイムが鳴り響いた。

「どうやら、やる気が無くても依頼は来るみたいだな。」

そう言う順司の顔は勝ち誇ったようににやけている。

「くぬぬ…そうみたい、ですね。出て来ますよ…。」

悔しさをこらえながら、要は街路に隣接する表側のドアを開けた。

そこに立っていたのは、南国風のオレンジ色のワンピースを来た二十代前半ぐらいの女性だった。

黒髪に茶色い瞳という日本人特有の容貌である。

「あの…ここは刻の事務所…探し屋さんで間違いないですよね？」

開口一番、女性はか細い声で尋ねた。

「はい、そうですよ。」

「探してもらいたい物があるんですが…今はよろしいでしょうか？」

「もちろん、いいですよ。…立ち話もなんなので、中へどうぞ。」

要に勧められ、失礼しますと一礼し、女性は事務所の奥へと足を進めた。

中はカフェと見紛うほど、凝った煌びやかな装飾がされていた。

輝くシャンデリア…は無いにしても、小さな電球の灯ったかさつき電気であるし、床はほぼ一面赤い絨毯が敷き詰められていた。

「カフェ…みたいですね。想像以上に素敵な事務所で驚きました。」

「まあ…オーナーの趣味の一つです。お金無いのに、こういうことにはお金かけまくりなんだから。」

要のぼやきが終わるか終わらないかの内に、二人は廊下を抜け応接間に着いた。

「中へどうぞ。」

要に誘われ、女性も応接間内へ。

そして言われるままに、長椅子に腰掛けた。

「それで今日はどんなご依頼で…」

「どんな依頼で、はるばるここを訪れたのかな、美しいレィディ？」

要の言葉を遮り、陸斗が尋ねた。

「美しいレィディなんて…そんな…」

女性は頬を紅潮させて、困惑しているように陸斗から目を逸らした。

「いやいや、本当に美しい。仕事が終わったら、美味しいコーヒーを出してくれるカフェにでも…」

「依頼人をナンパするなっての、陸斗！」

バシッと要の平手打ちが陸斗の肩に見事クリーンヒット。

「痛って！何すんだよ、要！」

「依頼人さん、戸惑ってるでしょうが！大体、初対面の女性をナンパするなんて…常識がなってないんだから。オーナーもそう思いますよね？」

「…に、本格的なイタリアレストランがあるんですよ。ご一緒にどうですか？」

「……って、オーナーもナンパしないの！」

要の怒声が響き、いやすまんとオーナーは女性の手から自分の手を離した。

「全くもう…油断もスキもないんだから。」

「あの…」

「あ…すみません、見苦しいところを見せてしまって。本題に入りましょうか。」

ためらいがちに話しかけてきた女性に対し、要は微笑みつつ言葉を返した。

「はい…まずは自己紹介を…。私の名前は春川雫（ゆきかわしずく）といいます。とある会社で事務をしています。」

そう言って、雫はよろしくお願いしますと一礼した。

「こちらこそ、よろしくお願いします。私も事務係なんですよ…この事務所の、ですが。雪森要といいます。椅子に座ってタバコを吸ってるのが、オーナーの八代内　順司さん。…ソファで肩さすっているのが、ナンパ魔の溌　陸斗。」

そんな説明は無えだろうがと陸斗の文句が聞こえてきたが、要はお構いなしに続ける。

「要さんに順司さんに陸斗さんですね。改めてよろしくお願いします。」

「はい！…それで依頼品は何ですか？」

「…指輪です。翡翠のルビーが付いた、婚約者からの贈り物の指輪なんです。」

言葉と共に、雫はバッグから一枚の写真を取り出しテーブルに載せた。

「翡翠のルビー…か。ルビーっつったら、紅いイメージがあるけど、今はそんな色の物があるのかよ、要？」

陸斗が訊いて、

「あるんじゃないの？…いや、よく知らないけど。」

要は困り顔で答えた。

「翡翠のルビー、か…。」

写真を手に取り、ぽつりと呟く順司。

「オーナーは、知ってるんですか？」

「話に聞いたことあるぐらいだけどな。確か…星陵鉱山の会社に勤める社員の一人が掘り出したとか。」

よくご存知ですねと、雫は目を見張った。

「その社員というのが、私の婚約者です。数ヶ月前…彼は星陵鉱山で翡翠のルビーを掘り出しました。…鑑定の結果、それは大変価値のある貴重な宝石だというのが判明しました。何十人という宝石商から売ってくれと言われましたが、彼は全て断りました。それから、知り合いの指輪職人に依頼して、婚約指輪に加工してもらったのです。しかし…一週間前、何者かに盗まれてしまったのです。」

「そうなんですか…。」

「…犯人の目星は付いています。警察にも届けましたが…相手が相手なもので、不用意に手出しができないのです。…そういう事情で、あなた方に依頼しに来たのです。」

うなだれる雫を、大丈夫ですよと要が宥める。

「…その犯人っていうのは、一体誰なんですか?」

「それは……。」

短い沈黙。

順司のタバコを吐く息の音だけが、耳に入ってくる。

「……紅咲　紗耶香（べにざき）さん。」

「なるほど、な…。それは警察も介入できねえわけだ。」

陸斗が納得したように返した。

「紅咲紗耶香って…あの…有名女優の…？」

「はい…。私と彼女は…高校時代に同じ部活に所属していたのです。」

紅咲紗耶香…要は、頭の中でその人物像を思い描いた。

常に赤や黄色といった派手色の服を身に纏い、茶色の天然パーマの髪と赤い瞳を持つ。

プライドが高く、欲しい物はどんな手を使ってでも手に入れないと気が済まない性格である。

しかし、その演技力はずば抜けており、映画やドラマのオファーが後を絶たないという。

「今も友達としてのお付き合いを？」

「友達…というのかはわかりませんが。高校時代の誼で…などと食事に行くことはたまにあります。私が翡翠のルビーを持っていることを知っているのは…彼女だけなんです。」

「そりゃ、怪しすぎるくらい怪しいぜ。まず間違いねえよな。」

陸斗の意見に、確かに…と要も同意した。

「お願いします…皆さん！お金なら、望むだけお支払いします…。今の仕事から彼が帰って来る前に…あの指輪を見つけてきて下さい！」

雫は深々と頭を下げ、懇願するように言った。

「雫さん…。わかりました、お引き受けしましょう。陸斗もオーナーもそれでいいよね？」

「んー…まあ、俺はいいけど。美人の頼みは断れねえしな。」

陸斗は左手の指先でシャーペンをクルクルと回しながら答えた。

「オーナーは……って、あれ？」

次に要が社長イスに目を移すと、今の今まで座っていたはずの順司の姿は無かった。

「順司さんなら出てったぜ。いつも通り、スクラッチやってくるってよ。」

「い、いつの間に…。はあ…仕方ないか。順司さん抜きでやるしかないなあ。」

呆れ顔をしつ肩で大息をつく要。

「お二人で大丈夫ですか…？」

「…大丈夫です。順司さんが居なくなるのは、日常茶飯事ですから。気が向けば合流するでしょうし。」

それでも心配そうな顔をしている雫に、

「いざとなりゃ、こっちには奥の手があるんで。雫さんは、ここでのんびり構えてくれりゃ、それでいいんすよ。」

陸斗が要の言葉に補足するように言ったのだった。

「住所は…うん、ここで合ってるはず。」

要はメモを見ながら、自問自答するように言った。

「セキュリティ抜群だな…さすが女優の家は違うぜ。」

双眼鏡で紅咲宅を観察しながら、陸斗が呟く。

二人は、紗耶香の家の近くの電柱から住居を観察していた。

「ボディガードらしきゴッツい奴らが、十数人に…警察犬としてよく使われる犬…名前は忘れたけど。とにかく、その犬が犬小屋に二匹。赤外線センサーが無数に張り巡らされてるときたもんだ。」

「どうする、陸斗？」

「時の魔術を使うに決まってんだろ。」

要に言葉を返すと、陸斗はポケットから水色の砂が落ちる砂時計を一つ取り出した。

「もちろん、準備はできてるよな、要？」

「当ったり前でしょ。…いつでもオッケーだからね！」

「それじゃ、行くぜ！時の守護者マテリエルよ…今我にその力を貸さんことを！」

呪文のように呟き、砂時計をひっくり返す陸斗。

すると…まるでビデオの停止ボタンのように、全ての物がピタリと動きを止めた。

「砂が落ち切るまでの時間は三分間…。行くぜ、要！」

誘いかけると同時に陸斗は走り出していた。

目指すは、紅咲紗耶香の衣装・化粧部屋。

「毎回言われなくても、わかってるって！」

要も陸斗に少し遅れ、紅咲邸へと侵入した。

（衣装部屋っつったら、二階にあるんだよな。）

そう踏んだ陸斗は、一階の散策を要に任せ二階を散策していた。

廊下にずらりと並ぶ部屋を一つ丹念に調べていく。

（たくっ…部屋作りすぎなんだよ。あーっと…ここは、ヒアリングルームか。んで、次が…書庫な。それからここが…って、三分どころか日が暮れちまうっつーの！）

七部屋ほど調べた時、

「陸斗ー！衣装部屋あったけど…無かったよ、指輪。」

階段を駆け上ってくる要の声が聞こえた。

「衣装部屋に無かった…？おっかしーな…紅咲紗耶香はどんなに大切なもんでもアクセサリーは衣装部屋に置く癖があるはずなんだけど。」

「紅咲紗耶香がはめてるんじゃないかな？」

「…だとしても、やっこさんの姿が見えねえんじゃどうしようもねえよな。そろそろ三分経つし…撤退すっか。」

陸斗が言って、要もそれがいいかもと同意した時。

「あなた達！誰の許しを得て、私の家に入って来てるの！？不法侵

入で訴えるわよ！」

後ろから女性のヒステリックな声が聞こえてきた。

二人が振り返ると、そこには紅咲紗耶香とサングラスをかけた屈強そうなボディガードが三人立っていた。

「…ちぇっ、見つかっちまったか。」

「いくらなんでも無謀すぎたみたいだね…。」

呑気に話をする要と陸斗を見て、紗耶香は馬鹿にされたように感じ、ますます憤った。

「この私をコケにするなんて…許さないわ！行きなさい、あなた達！」

「イェッサー、マドモアゼル紗耶香。」

紗耶香の命令を受け、ボディガード達は一斉に二人に遅いかかる。

哀れ二人は、彼らの手によって袋叩きに…！

……と思われたが。

「グアッ！？」

低い悲鳴を上げたのは、ボディガードの方だった。

いずれも腹部や背中足などを押さえ、座り込んでいる。

顔には苦渋の色と汗が滲んでいた。

「悪ぃけど、俺らも簡単にやられるわけにはいかねえんだよ。」

不敵な笑みを浮かべ身構える陸斗の両手には、短い木の棒が二本握られていた。

「なっ…凄腕のボディガード達を一瞬にして払いのけるなんて…！」

「次はあんただぜ、紅咲紗耶香？」

「くっ…まだよ！あなた達…こんな子供はさっさと追っ払いなさいよ！プロなんでしょ！？」

紗耶香の命令に、痛みをこらえ一人のボディーガードが立ち上がる。

「女の子の方を狙いなさい！武器を持ってないみたいだから。」

「イェ…ッサー！」

今度はターゲットを要に絞り、ボディーガードが突撃する。

「要！」

「大丈夫だよ、陸斗！…降魔ベルセブブ！」

要が左手を高く掲げると…

「ワット！？」

ボディーガードは弾かれたように、後ろ向きに倒れ込んだ。

紗耶香は思わず目を見張ってしまった。

要の後ろに立っていたのは、羊のような角と鋭い爪を持つ全身真っ黒の悪魔だったからである。

「あ、悪魔…！？」

「欲にまみれた人間よ…持ち主に指輪を返すがよい！」

ベルセブブを降魔させた要が言った。

口調は鋭く威圧的で、言葉を発したのは要ではないようだった。

「持ち主に返せですって…？これは私が手に入れたのだから私の物よ！誰に返せと言うの！？」

腰は引けていたが、あくまでも指輪を返そうとしない紗耶香。

陸斗は、めんどくせーなとため息混じりに呟いた。

「け、警察がこっちに向かって来ているはずよ！あ、あなた達こそ、早く出て行きなさいよ！！」

「あがくのもその辺で終わりにしとけ。」

紗耶香の後ろから、タバコを吸いながら歩いてきた人物が言った。

「あ…オーナー！」

「順司さん…来てくれたんですね。」

要は嬉しそうに、陸斗はいつもの低いテンションで返す。

「よう、ちょいと遅くなっちまったが…タイミングはバッチリだったみてえだな。」

「だ、誰よ、あなた!?下手な真似をすると…どうなるかわかって…」

「警察に強制連行させるてっか?…悪いが、電話は使えなくしている。電話線をちょいといじって、な。だから、警察を呼ぶっていう手は通じねえよ。」

順司は、来たら蹴るわよとわめく紗耶香の横をスッと通り過ぎ陸斗の隣に立つ。

「何てことを…!」

「…本当は、あんただってわかってるはずだろ?他人の物を奪って自分の物にしたところで、そこにあるのは空虚感だけだ。誰よりも寂しがり屋で愛情不足で…誰かに愛されたくて着飾るんだろ、紅咲紗耶香…いや、矢園　優羽(やぞのゆう)。」

「何を言ってるの…。私は…寂しがり屋なんかじゃないわ！そんな名前でもない…。私は…」

唇をわななかせ、紗耶香は口ごもっていた。

「矢園優羽…それが、あんたの本名なんだな。」

「ち、違うって言ってるでしょ！」

「紅咲紗耶香って名前より、よっぽどいいのによ。勿体ねえな。」

陸斗はからかうように笑って言った。

「人間…己を受け入れることが本当の強さであり、他人に受け入れてもらうのは、その後だ。順序を間違えるでない。」

「…小娘に私の何がわかるのよ！！」

紗耶香はそう言うと、懐から一丁のハンドガンを取り出した。

「これ以上、あなた達と話したくないわ。出て行きなさい…さもなければ撃つわ。」

「撃てるもんなら撃ってみな。」

「なっ…本当に撃つわよ！？」

ジャキ…。挑発するような発言をした陸斗に、紗耶香は銃口を向ける。

「……。」

仲間が危ないというのに、順司は止めもせずジッと成り行きを見守っているだけだった。

「いいぜ…そん代わり、後悔すんのはあんたの方だからな。」

「減らず口を叩くのね、あなた。そういう子供は大嫌いよ…消えなさい。」

紗耶香の右手が、引き金を引いた…。

「…順司さん！」

「おう、行くぜ。」

弾が当たる直前に、陸斗は素早く右に跳んだ。

すかさず、順司が紗耶香に向かって走る。

「銃ってのは、人を傷つけるだけの道具じゃねえんだぜ？」

「えっ…きゃっ！？」

パンッと乾いた銃声が響く。

しかし、今度は紗耶香が撃ったのではない。
…硝煙を上げる銃を持っていたのは、順司であった。
「あっ…。」
トサッ…と紗耶香は前のめりに倒れた。
「……っ……私の命を…奪うつもり…？この…泥棒が……！」
「…んなことするかよ。安心しな、紅咲紗耶香。順司さんが撃ったのは空砲だかんな。」
「空砲ですって…！？」
紗耶香は、苦渋の表情の中に驚きも入り混ざったような複雑な表情を浮かべていた。
「ああ、空砲だぜ？…ま、痺れて動けねえだろうが。プラズマガン

だからな。」

「プラズマ…ガン…。」

「…ゆっくり話してる暇は無さそうだな。指輪…頂いていくぜ？」

そう言うと、まるでマジックのように鮮やかな手つきで、順司はスルリと指輪を奪った。

「要…。陸斗。帰るぞ。」

「はい！」

「了解！」

いつも通りの彼女に戻った要と陸斗を連れ、順司は廊下の先の窓を開け飛び出していった。

「紗耶香様！」

一足違いで、執事やメイド達が駆け上がってくる。

「こそ泥どもめ…今ならまだ遠くには行っておらんはずだ！急ぎ、追いかけ…」

「その…必要は無いわ。放っておきなさい！」

憤然としている執事に、紗耶香が言った。

「しかし…紗耶香様！指輪を取り返さなくてよいのですか！？」

「もう要らないわよ…あんな指輪。この紅咲紗耶香が事件に巻き込まれたなんて…マスコミには知られたくないもの。この件は一切口外しないでちょうだい。」

同日、刻の事務所にて。

「こんなに早く探してきてくださるなんて…本当にありがとうございました。」

雫は指輪を左手の薬指にはめながら、笑顔で言った。

「いえいえ、どういたしまして。」

「それで…報酬の話ですが…。」

要の瞳がキラキラ輝いた。

依頼人の笑顔が何よりの報酬だが、もらえる物はきっちり貰いたいのである。

「…わっかりやすい奴。」

陸斗は、やや冷めた瞳を向けぼそっと呟いた。

「単純とでも言いたげだね、陸斗…。余計なお世話よ。あんただって、タダ働きは嫌いなくせに。」

「あの、これ…今回の依頼料です。」

そう言って、雫は数枚のお札をテーブルに置いた。

要はそれを受け取りながら、

「毎度ありがとうございました。」

ニッコリ微笑み返した。

雫が事務所を去ってから、さて…と要はソファにかけ直す。

「ちゃんと分けなきゃね、三等分に。あ…オーナーは居ないから二

等分しちゃってもいいかも。」

「…俺なら居るぜぇ？勝手に分けてるやつぁ、どこのどいつだ、要？」

「オ、オーナー…帰って来たんですね…。」

順司は帰って来たら悪かったかと毒づきながら、椅子にどかっと腰を下ろす。

「順司さん、お帰り。宝くじ…どうだったんすか？」

「ああ？…宝くじな。当たったぜ、五百円。」

「五百円…。」

要はやや呆れ顔で、順司に取り分を手渡した。

「オーナーにしては、当たった方なのかな…。でも、めったに当たらないんだから、そろそろ止めに…」

「うしっ。金も入ったところで、スクラッチやってくる。」

「いや、いい加減懲りてくれませんか？」

要の提案をスルーし、順司は元気に宝くじ屋に向かうのだった……。

―To be continued―

Ｄａｎｇｅｒ－仕事に危険は付き物－

「まずい…非常にまずいぞ…！！」

男は、その場を行ったり来たりしながら、一人呟いた。

ビシッとした背広姿で、左脇には茶色い小さな鞄を持っている。

歳は三十代前半ぐらいであろう。

（どうする…“あれ”が無ければ、私の人生も…幸せな生活も…何もかも終わりだ…。）

絶望し、しゃがみ込んだ男の横を人々は不審そうに見ている。

関わり合いになりたくないと、足早に通り過ぎる主婦も居た。

と、その時。

「…それでね、その人達が私の指輪を探してきて下さったの。」

「へえ…すごいね。俺からも礼を言っておかないとな。」

一組の男女の話し声が、男の耳に入って来た。

（探して来て…くれた…？）

「き、君！その話…私にも詳しく聞かせてくれ！」

「えっ…？あなたは…？」

気づけば、男は男女の内の女性の方に、話し掛けていた。

「おい…あんた！俺の彼女に何の用…」

「頼む！その…探してくれた人達のこと…聞かせてくれ！」

こいつ…と今にも殴りかかりそうな男性を、女性が手で制止した。

「お急ぎなんですよね…？話すと長くなりますので、“刻の事務所”とだけお教えします。場所は……です。」

「……だな？わ、わかった。ありがとう！」

そう言うと、男は一目散に走り去っていった。

「一体、何なんだ…あの人は？もしかして、雫の知り合いだったのか？」

「いいえ…知らない人よ。だけど…困ってたみたいだから放っておけなくて…。それに…」

それに何だいと訊く男性に、雫は一呼吸置いてから答える。

「あの人には刻の事務所の方々の助けが必要だと思ったから。」

「ジャンケン…ポン！」

少女の威勢のよいかけ声と共に、全員一斉に手を出す。

「ちっ…今日は俺が買い出しか…。」

グーを出した男性が、忌々しげに呟く。

「決まりだね。今日は順司さんが買い出し係！」

「たくっ…仕方ねえが、行って来っか。要…それから陸斗。しっかり留守番しとけよ？」

「りょーかい！」

「りょーかいっす。」

順司というらしい男性に、要という少女と陸斗という青年が答えた。

パタンと裏口のドアが閉まり、順司は出て行った。

「……何時頃になると思う？」

要がテレビのリモコンを手に取りながら、陸斗に訊いた。

「三時間後。なまものは危ねえかもな。」

「大丈夫。なまものは、私が全部買って来るようにしてるから。…冷凍食品は溶けるかもしれないけど。」

「それは確実。順司さん、寄り道がある意味で趣味だし。」

パラッ…と雑誌をめくりながら、陸斗が相づちを打つ。

「寄り道っていうか…“宝くじが”だよね…。」

誰にともなく要が言った。

テレビでは、天気予報が放送されていた。

『明日の……地方の天気は曇り時々晴れ。日中は快晴となるでしょ

う。』

「あ、そういえば陸斗…？」

何だよとぶっきらぼうに聞き返す陸斗。

「いや、ずっと聞きたかったんだけどさ…陸斗って…」

バンッ！！

要の言葉を遮るほど、のドアが凄まじい勢いで開けられた。

「はあ…はあ…。す、すまないが…はあ…刻の事務所は…はあ…ここ…だよな？」

ドアの前に立ってそう訊いたのは、サラリーマン風の格好をした男性だった。

よほど急いできたのか、前髪はバラバラに乱れ、顔全体に汗が滲んでいる。

「あ、はい…そうですけど。」

呆気にとられつつも、要が答える。

陸斗はチラと見ただけで、すぐに雑誌に視線を戻した。

「はあ…早急に…探して…はあ…欲しい物が…あるんだが…はあ…。」

「えっと…とりあえず座りませんか？奥の方で話を伺いますから。」

「い、いや…ここで構わない…。」

男はドアを閉め、近くのイスに腰掛けた。

「突然すまなかった…。だが、どうしても見つけなければならない物があって……。そう…明日の８時までに…いや…それでは遅刻する…７時半までにだ！」

「あの…何を探せばいいんですか？それから…名前を伺いたいんですが。」

相手に失礼の無いようにと、要は言葉を慎重に選んで訊いた。

「あ、ああ…すまない…。気がはやってしまって…。私は、こういう者だ。」

男は左胸のポケットから、一枚の名刺を取り出し、要に手渡した。

「……『株式会社クエート。代表取締役、西大寺　大期（さいだいじ　たいご）』さんですか。
私は、雪森　要です。そっちのソファに居るのが溌　陸斗。今は買い出しに行っているんですが…オーナーが八代内　順司さんです。よろしくお願いします。」

要はそう返し、軽く一礼した。

「あ、ああ…よろしく。」

「それで…ご依頼の品は何ですか？」

「…パソコンのディスクだ。明日の会議に使う重要な資料を記憶しているディスク…。ああ…は、早く探してくれ！金なら…出せる限りでなら…いくらでも出す！だ、だから早く！！」

興奮する西大寺を、要が落ち着いて下さいとなだめる。

「…ディスク、か。で、どこに落としたって？」

陸斗が不意に口出しする。

「ち、ちょっと…陸斗！敬語で話しなさいよ…失礼じゃんか。」

「へいへい…。どこに落としたんですかっと。」

「ずいぶんやる気が無い態度だな…君。まあ、いい…見つけてくれさえすれば…いい。」

西大寺は多少憤慨していたが、つとめて落ち着き払った態度を心掛けた。

「すいません…陸斗は毒舌なもので。」

「…見逃しておこう。その代わりといっては何だが…必ず期限までに探してきてくれ。場所は…五番地、通称ペリルラビリンス（危険迷路）と呼ばれる場所だ。」

「ペ、ペリルラビリンス！？あの…入り口が無数にあって、入る度に出口が変わって法則を知らないと出れなくなるという迷路！？」

要が素っ頓狂な声を上げた。

「き、君達はプロなんだろう？ならば、危険な場所でも探せるはずだろ？」

「…ったり前だろ。いいぜ、その依頼受けてやる。」

陸斗は挑戦的に言葉を返す。

「な、何言ってんの…陸斗！ペリルラビリンスだよ、ペリルラビリンス！あんなところで探し物なんてできるわけ…」

「た、頼んだぞ、探し屋！明日の7時半までに、この住所に届けてくれ！」

「あっ…西大寺さん！まだ受けたわけじゃ…」

西大寺は要の止めるのを聞かず、あっという間に事務所から出て言ってしまった。

テーブルに、一万円札を数枚残して。

「…陸斗。責任とって、しっかり働いてよ！」

「要もな。」

「なんでよ…。私、受けるって言ってないじゃん…。」

要は嘆きつつも、視線は西大寺が前金として置いていった数枚の一万円札にあった。

（…とか何とか言って、お前も報酬次第じゃ受けようと思ったくせに。）

陸斗は心の中で言っただけで、あえて口には出さなかった。

午後四時二十分、五番街にて。

通称ペリルラビリンスと呼ばれるそこは、狭い路地がいくつも交差し合った“迷路”である。

そこに住むのは、世間では暮らしていけない無法者達。

故に、彼らが嗜好するタバコの煙が充満しており、視界は極めて悪い。

「…で、これがどういうわけか説明してもらおうか。」

順司が不機嫌そうに眉をしかめて言った。

「……陸斗に訊いて下さいよ。引き受けたのは陸斗なんですから！」

「ん…売られたケンカを買っただけっすけど。」

「いや、ケンカ売られてないし。」

適当に答える陸斗に、要が突っ込みを入れる。

要達三人は、一番近い入り口からゆっくり中を散策していた。

そこの住人達は、怪訝そうに見ていたが、まだ襲ってくる気配は無い。

そもそも、襲う気力すら無くしてしまうほど、ペリルラビリンスという場所は複雑難解な迷路なのだった。

「売られたケンカを買っただけ…か。ならば、仕方ない。」

「許しちゃっていいの、順司さん！？しかも、そんな理由で！」

「売られたケンカは買う…俺が陸斗に始めて教えた言葉だからな。」

「いや、純粋な子供であったろう頃に何教えてんの、順司さん！」

二度目の要の突っ込みを、順司はハハッと笑って流した。

「…って、漫才やってる場合じゃないし…。障害物は何も無いはずなのに…見つからないですね、ディスク。」

はあと要がため息まじりに言った。

ザッ…ザッ…と三人の足音が、不気味にこだましている。

虚ろな目をした住人と、何回か目が合って、そのたびに要はギョッとした。

「…なに、びびってんの、要。」

「別にびびってなんかないよ！ただ…なんか…」

「お探しのディスクとやらはこれかい、お嬢ちゃん。」

不意に要の言葉を遮って、二人の住人が要達の前に立ちはだかった。

一人はちぢれた赤髪を持ち、舌や耳など至る所にピアスをはめた若者。

頬にはそばかすのようなぶつぶつができており、笑い方もニタニタしていて気味が悪い男性だ。

もう一人は茶色い癖毛髪を肩の位置まで伸ばした若者。こちらも舌と耳にピアスをしている。

おでこの位置にサングラスをかけ、舌をダラリと出した同じく気味の悪い男性。

「頼り無さそうなりサラリーマンが落としたのを、優しい俺達が拾

っておいてあげたよー。」

赤髪の若者が言って、

「そうそう。これが欲しい？金額次第では返してあげようか？」

茶色い癖毛髪の若者がつけ加えるように言った。

「…じゃあ、無料ってことで！」

「ああ！？この女…ナメてんのか？」

要の軽い口調に、赤髪の方が激怒する。

「だって、金額次第って言ったでしょ？無料にしてくれたら、二人とも無事でいさせてあげる。」

「いっちょまえに挑発だあ？兄貴…俺らバカにされてるみてえですぜ！」

茶髪の方も憤慨してみせた。

だが、要達は全く怯む様子は無い。

「答えは、“はい”か“いいえ”かでよろしく。」

「ん…三秒以内で。」

「言うようになったじゃねえか、要。ま、俺ぁどっちでもいいけどよ…。」

陸斗と順司が面倒くさそうに小声で付け加えた。

「それが人に物頼む態度か、ああ？」

「兄貴…やっちまいやしょうぜ！」

堪忍できなくなったようで、茶髪の方がうらぁと要に殴りかかる。

ナックルをはめた拳が要の顔面に…

「のあっ！？」

…当たらなかった。

要がひょいとかがみこんだので、スカッという音が鳴った見事な空振りに終わったのである。

おわっとと、と茶髪男が態勢を崩す。

そこに、

「ほいっ…と。」

ゴッ！！

いつの間にか両手に木の棒を携えていた陸斗が、鳩尾に痛恨の一撃を加える。

「ぐはっ！！」

茶髪男は短い悲鳴を上げると、よろめいてドッと壁にぶつかりバタッと地面に倒れた。

「な…相棒に何をした！？」

赤髪の男の目は、驚きで大きく見開かれ、やや逃げ腰だった。

「棒で打っただけだぜ？鳩尾に一撃食らったら、大抵のやつは動けなくなるかんな。」

「くそっ…ふざけた真似しやがって…。女より先に痛い目見せてやる！！」

宣戦布告するように言うと、赤髪の男は懐からサバイバルナイフを取り出した。

そして、

「うらあぁぁ！！」

ナイフを振り回しながら、陸斗に向かって突進してきた。

ガッ！

ナイフは、陸斗の武器である棒に深々と突き刺さる。

「あーあ…めんどくせー。順司さん、よろしくお願いっす。」

「ちっ…仕方ねえな。」

慌ててナイフを抜こうとする赤髪の男に、順司はプラズマガンの照準を合わせた。

「くそ…抜けろ！離せよ、ガキ！！」

「ガキで悪かったな。無理矢理抜くと、ナイフの先が折れ…」

陸斗の警告は間に合わず、ナイフはバキッと音を半分にきれいに折れた。

「なっ…ナイフが折れるなんて…」

「だから警告してやったのに。…順司さーん、今っす。」

おうよと答えると、順司は銃の引き金をグッと引いた。

パンッ！

「ぬあっ！？」

銃口から飛び出した光の塊…プラズマは、狙い違わず赤髪の男性の左足首に当たる。

たまらず、男性はしゃがみ込み、足を両手でさすった。

そこへ、

「たあっ！！」

ドカッ！

要の強烈な足蹴が飛ぶ。

「ごふっ！！」

それは、男性の背中を直撃。

彼は目を回しながら、前のめりにドッと倒れた。

「はい、終わりっと。降魔するほどの敵でもないね。」

ぱんぱんと手をすり合わせながら、要が言った。

「雑魚の雑魚ってレベルだもんな。つまんねえ…さっさと出口探して帰るぜ。」

「帰りたいのは山々だが…出口はどっちだ？」

順司の問いかけに、

「どっちって…あれっ？一本道じゃなかったっけ…？」

要は周りを見渡しながら、自問自答した。

入った時は確かに一本道を通ってきたはずが、改めて振り返って見てみると、道が二本に増えている。

「…増えてるね。」

「増えてんな、絶対。」

「増えたな、なぜか。」

要、陸斗、順司の三人とも、ほぼ同じことを同時に呟いた。

「……なんで？」

「知るかよ…壁に足でも付いてるんじゃねえの？」

「いや、それは無いでしょ！足が生えた壁なんて話、聞いたことないんだけど。」

陸斗の意見に、的確に突っ込みを入れる要。

「…無えと百パーセント言い切れるのか、要？」

そう問いかけて真剣な眼差しを向けてきたのは、陸斗ではなく順司だった。

「へっ？どういう意味で…」

「…静かにしろ。何か聞こえる…。」

「聞こえる…？」

順司の報告に要も耳を澄ましてみたが、特に何も不審な音や声は聞こえない。

「聞こえないですよ、オーナー。」

「俺にも聞こえねえ…ってことは、順司さんは壁の心を読んでんじゃねえか？」

陸斗が言ったその時。

「陸斗、思い切り棒で壁を叩け！要、利き足で壁を蹴れ！…」

順司が厳しい口調で二人に命令したのだった。

突然のことに、要も陸斗もえっと目を丸くしている。

「急にどうしたんで…」

「いいから早くしろ！要から見て、ちょうど真ん前の壁だ！」

「はあ？…やってみますけど、後で理由聞かせて下さいね。」

首をひねりつつも、要は壁の正面でふぅと息を吐き護身術の構えをした。

「…ふうん、なるほど。そういうことか。」

陸斗は誰にも聞こえないような小さな声で言って、壁に向いて身構える。

「よし…行くぜ？」

問いかけるように言って、プラズマガンを身構える順司。

一塵の風が、三人の間をサーッと吹き抜ける。

「…今だ！思い切り行け！」

「たあっ！」

「やっ！」

順司のかけ声で、三人は一斉に壁に向かって、攻撃を仕掛けた。

ボコッという打撃音が二回と、銃声が一度鳴り響く。

ドンッという衝撃音と共に三人の目の前の壁が倒れた。

すると、

「まさか見破られるとはな。」

「しかし、馬鹿な奴らだ。自分達から死期を早めるなんてよぉ…。」

壁の後ろから、二人の人間が出てきた。

そして、その二人を筆頭に更に何十人という若い男女が続々と現れた。

「おー…出て来た、出て来た。さすが、順司さん。」

「えっ…何、これ？どういうこと？」

陸斗は見下ろすように右手を額の前にかざし、要はぽかんとしていた。

「何だ、まだわからねえのか、要？壁は本当の壁ではなく、ただのハリボテだったっつうことだ。」

「…てめえら、この状況で何くっちゃべってんだ！？」

意外にものんびりした調子の三人に、筆頭の内の一人は憤っていた。

短いオレンジ髪をツンツンにはねさせた、ジャンキー風の若い男性だ。

「なあ、リーダー？こいつらは、痛めつけてから金目の物を漁りましょうぜ？」

「…そうか。活きの良い魚ってのは、まず弱らせてから後に身を裂くのが常識だったな。…野郎共、やっちまいな！」

「おう！！」

リーダーのかけ声で、ナイフなどの武器を手にした何十人という若者達が一斉に要達に襲いかかる。

「…俺らとやろうってわけな。」

「力の差を思い知れや、ガキぃ！」

「おらおら！さっさと、金目のもの渡して降参せんかい！」

鎌やナイフを手にした五人の若者達が陸斗に向かってくる。

哀れ、陸斗は若者達の武器の餌食に…

「ぐはっ！？」

「…っう！？」

…はならなかった。

悲鳴を上げ、バタバタ倒れていったのは、若者達であった。

「くそっ…なめるな、ガキっ！！」

「ガキじゃねえーって。」

パキッ！

一人の男性が振り上げたナイフを、陸斗は棒で根元からへし折った。

「なっ…棒でナイフを…！？」

「この棒は特殊なんだぜ？ナイフなんか通すわけねえじゃん。…はっ！」

ドカッ！

「ぬあっ！」

あっという間に、陸斗は五人を棒で倒してしまった。

「ん…順司さんと要は…っと。おっ…やってる、やってる。」

「愚かなる人間よ…滅びるがよい！」

サタンを降魔させた要が言って、辺りに凄まじい衝撃波が起きている。

「ぐはぅ！！」

「がっ…！！」

「きゃっ！？」

要を取り囲んでいた若者達は、全て壁にぶつかり地に倒れていった。

「ちっ…やあっ！」

衝撃波をかいくぐり、一人の若者が要の背後に回る。

「調子に…のんな、女がっ！！」

「…てやっ！」

「がはっ！」

要はくるりと体を反転させ、踵落としを見舞わせた。

「ふう…こっちも終わったよ、陸斗。オーナーは…っと。」

「よっ…と。」

パンッという破裂音が陸斗と要の耳にも、否応なしに入ってきた。

「じ、銃を使うなんて卑怯だぞ、こいつ！」

「あー…？おまえらに卑怯呼ばわりされる覚えは無えな。」

パンッ！

「うああっ！」

再び銃声が響き、また一人若者が痺れた体を携え地に臥す。

「正々堂々と勝負しなさいよ、弱虫おやじ！」

「…弱虫おやじだ？」

言葉に反応するように順司の右肩がピクッと動く。

「今ね…はああっ！」

「うおっと…！やるな、未来の美人さんよ。」

鎌を持った若い女性の攻撃を、寸手のところで彼はかわした。

「あんたの度胸に免じて、プラズマガンは使わず勝ってやるよ。」

「あら、それは有り難いわね…たあっ！」

若い女性は、今度は順司の顔を狙ってきた。

それを順司は、不敵な笑みを浮かべ、上半身を後ろに曲げひょいと交わす。

「プラズマガンを使わなくても、あんたと戦える。」

「えいっ！やっ！…なんで、当たらないの！」

女性はがむしゃらに攻撃を繰り出す。

順司は最小限の動きだけで全て避けてみせた。

「なんでか教えてやろう。それはな…あんたの心を読めるからだ。はっ！」

「ああっ！！」

順司の左足の蹴りは、女性の膝の裏に当たった。

女性は体勢を崩し、トサッと倒れた。

「ま…まだよ…私は…！」

「止めときな。きれいな体を、俺は傷つけたくねえ。周りを見りゃどっちが優勢かわかるだろ？」

「……っ。」

プラズマガンの銃口を頭に向けられ、女性は悔しそうにうつむいた。

「…タネがわかったてころで帰るか、要、陸斗。」

順司が散歩から帰るような口調で言って、

「帰りましょうか。」

「ん…そういうこてで。」

要と陸斗も言葉を返し、三人は壁のあった場所を通りながら帰路に

着いたのだった…。

午後八時一分。

刻一とき一の事務所にて。

依頼者の西大寺は、ありがとうと礼を述べながら、ディスクを受け取っていた。

「最悪の場合、明日の朝ギリギリになるかと思っていたが…素晴らしい働きぶりだ、探し屋！」

「これでも、プロですから。」

要要は当然のことのように、さらっと返した。

陸斗は、疲れたのか雑誌を顔にかけソファーで眠っている。

「いやいや、さすがだ！オーナーの八代内さんの鍛え方がいいんでしょうな！」

「鍛えた覚えは無えんだが…。」

イスに座ってテレビをぼうっと見ていた順司が、ぽつりと呟く。

（鍛えられた覚えは少しはあるかも。）

要は心の中で順司に言葉を返した。

「それで…報酬の話ですが。」

「は、はい！」

要の背筋がピンと張る。

西大寺は、これで足りるだろうかと徐に財布から札を出した。

「毎度ありがとうございます！またのお越しをお待ちしてます。」

「…スーパーの店員みてえな返し方だな。」

ふああと大きくあくびをしながら、陸斗が言った。

―続く―

Ｏｎｓｅｌｆ－自分という壁－

「ていやっ！」

「うわっ！」

ドンッという音を立てて、投げ飛ばされた側は床に叩きつけられる。

「痛ってー…鬼怒川さん、新人なんだから手加減して下さいよ…。」

「自分の中に手加減という文字は無い。新人だからって…甘ったれるんじゃねえ。」

鬼怒川と呼ばれた青年は、すごむような調子で言った。

「そんな…」

「わかったら、もう一本行くぞ？お前の根性、親父に代わって俺が叩き直し…」

ガラッ！

彼の言葉を遮るかのように、道場の入り口の扉が開いた。

「た、大変です、鬼怒川さん！おばさんから電話で…。あなたのお母さんが…！」

「母さんが…？まさか！」

どこ行くんですかと尋ねる後輩達を残し、青年は道場から駆け出していったのだった…。

「…おい、要。もう何時間観てるんだ、それ。」

半ば呆れ果てたような口調で、順司が要に尋ねる。

「まだ二時間しか観てませんよ、オーナー。それにこれからがいいところなんです！」

要は食い入るようにテレビを観ながら、言葉を返した。

テレビに映っていたのは、黒帯を締めた二十代の女性が格闘技のレクチャーをする映像だった。

テレビ周辺には、ＤＶＤケースが三枚散らかっており、一枚だけ中身が入っていなかった。

…恐らく、それが彼女が現在観ているＤＶＤなのだろう。

「新しいレンタルビデオ店も罪作りなもんだぜ…。」

陸斗は小さくぼやいた。

彼はソファーに座ってティラミスを食べてながら、事の成り行きを傍観していた。

「二時間観てりゃ十分だろ…。俺ぁ、三時から『宝くじに当たる人の秘訣』を見てえんだが。」

「宝くじなんかより、こっちの方が大事です！なるほど…あそこはかがんで、次に裏拳を使うんだ…。」

「俺にとったら、宝くじの方が大事なんだが…。」

「我慢して下さい！私はどうしても今日中に全部観て覚えたいんです！」

要は一度言い出したら聞かない。

順司は諦めて、はあと深いため息をついた。

「…ふう、ご馳走様。舞春堂のケーキは、まあまあってところかな。」

ケーキを食べ終え、陸斗は満足気に言った。

心無しか、顔がほころんでいるようだった。

「……んっ？三時からオーナーの観たいテレビあるんですよね？…今、何時ですか？」

何か思い出したかのように、要が順司に訊く。

「あ？何時も何も…もう二時五十九分…」

「…二時五十九分！？もう始まっちゃうじゃないですか！」

要は大声で言うと、わたわたとＤＶＤを取り出し、丁寧にケースに戻した。

そして、入力切替をして、チャンネルを代えた。

「おっ？『宝くじに当たる人の秘訣』見させてくれるか？」

順司は期待の眼差しを、画面に向けていた。

「違う気がするけどな…」

陸斗が呟いた時。

壁に飾ってある鳩時計が三時を知らせた。

……始まった番組は順司の期待を裏切るものだった。

『三時になりました。突撃街角レポートのお時間です！今日は…格闘技の名門！鬼怒川道場を訪れました！』

女性レポーターが元気良く言って、体育館のような場所が映し出される。

「……。」

テンションの高い要とは反対に、順司は悲しそうに眉を下げた。

口にくわえたタバコが、ぽろっとテーブルに落ちる。

「…やっぱりな。順司さん…今度、宝くじ関連のＤＶＤを俺が借りてくるっすから。…元気出して下さいっす。」

陸斗が同情するような瞳を向け、順司に言った。

『早速、鬼怒川師範を訪ねてみましょう。すみませーん！』

女性レポーターは、道場内に入り、近くに居た青年に声をかけた。

『えっ、これもしかして…“街角突撃レポート”ですか？弱ったな…』

『そうです。鬼怒川師範はいらっしゃいますか？ぜひ、話を伺いたいのですが…。』

『それが…先日腰を痛めてしまって、休養中なんです。』

青年は罰が悪そうに小声で言った。

「え…そうだったんだ…。残念だな。」

要はガッカリしたようにハアと息を吐いた。

『では…今は誰が指導を行っているんですか？』

『はい…鬼怒川師範の息子さんが指導をしてくれるんですが…今日はちょっと。すみませんが、取材はまた今度にしていただけませんか？』

青年が言って、レポーターは仕方ないですねと素直に引き下がった。

『残念ながら、師範も指導者の方もご不在でした。仕方がありませんので、少し早いですが、天気予報を…』

ピッとリモコンでテレビが消された。

「あーあ…久々に鬼怒川流格闘術が見れると思ったのに。息子さん…なんで居ないのよ！」

ガラッ！

要が嘆くのと同時に、事務所の入り口のドアが開いた。

「…探し屋が居るっていう事務所は、ここだよな？」

ドアを開けた人物は、開口一番訊いた。

長い黒髪を肩の位置で一つにまとめ、背は高く細い体格の、男性には魅力的に移る容姿だった。

左目の下に、小さな泣きぼくろがある。

「えっ…そうですけど。」

「早急に探してほしい物がある。期限は無いけれど…なるべく早く、だ。」

「えっと…とにかく座って話をしませんか？私達も詳しく聞かないことには、仕事をできないので。」

要に促され、依頼人は失礼しますと応接室に向かった。

陸斗と順司も顔を見合わせて、とりあえず応接室に移動した。

「…ふうん、なかなかきれいな事務所だな。インテリアも凝ってる…。」

「見る目あるじゃねえか、お嬢ちゃん。」

順司は嬉しそうに微笑んだ。

「…お嬢ちゃん？」

「美しいレイディ、依頼は速やかにお果たしいたしますよ。その代わりといっては何ですが…その後、映画でも…」

「レイディ…？」

依頼人は怒っているように、眉をつり上げた。

左手の拳は、テーブルの下で固く握られている。

「こら、二人共！依頼人をナンパするなっていつも言ってるじゃない！」

「そこまで怒るなよ、要。挨拶みてえなもんだろ。」

叱りつける要に、陸斗は全く悪びれずに返した。

「ああ…悪ぃ悪ぃ。美人を見かけると…つい、な。」

「もう…本当に止めて下さいよね。いきなりナンパされて、嫌って女性も少なくないんですから。」

順司は、今度からは気をつけると平謝りした。

「……。」

「あ…すみません、依頼人さん。二人共、悪気は無いんで…」

「…自分は男だ。間違えんなよ！」

依頼人は強い口調で言って、バンッと机を叩き立ち上がった。

要も陸斗も順司も、目を丸くして驚いていた。

「どいつもこいつも…見た目が女っぽいからって馬鹿にしやがって…。親父の方が気合いが入るなんて言う奴も居るし…。親父が何だよ！自分だってな…好きでこんな顔に生まれたんじゃねえ！」

「…馬鹿にはしてねえんだけど。」

憤る依頼人に陸斗が小さく返した。

「だったら、どういう意味で言ったんだよ！？」

「あ、あの！ごめんなさい、依頼人さん！陸斗もオーナーも悪気があったわけじゃないんです！私が謝りますから、許して下さい！」

「な…なんで、あんたが謝るんだよ…？」

深々と頭を下げて謝る要を見て、依頼人は面くらったような顔をした。

「…ちょっとした勘違いだぜ？そこまで怒ることねえだろ…。」

「陸斗っ！」

「へいへい…俺が悪かったって。もうしねえよ。」

軽く頭を下げて、仕方ないとばかりに陸斗も謝る。

「悪ぃ悪ぃ…俺も陸斗もナンパ症なもんでな。要の言う通り…悪気はねえんだわ。気を取り直して自己紹介といこうや。」

順司はふうとタバコの煙を吐きながら言った。

「俺ぁ、八代内　順司。この事務所のオーナーだ。」

「…溌　陸斗。」

「雪森　要です。」

順司、陸斗、要の順番で自己紹介をした。

「自分は鬼怒川　漣（きどかわ　さざなみ）。」

漣というらしい依頼人は、ぶっきらぼうに言った。

「鬼怒川って…もしかして、鬼怒川道場の鬼怒川　竜冴師範（きどかわりゅうご）の息子さん！？」

興奮しているのか、要は身を乗り出すようにして早口に尋ねた。

「まあな。あんた…知ってるのか？」

「もちろんです！鬼怒川師範は、私の憧れなんですから！その息子さんなんだ…。」

「ああ。だからといって、自分は親父の名声に甘える気はねえ。自分はいつか、親父を超える格闘術の師範になってやる！」

「…おーい、盛り上がってるとこ悪いけど、漣だっけ？急いでるんじゃなかったのかよ？」

陸斗に言われ、漣はハッとしたように、居住まいを正す。

「やべっ…危うく忘れるとこだった。急いで探してほしいものは、クロストメティアという名前の花だ。」

「…はい？」

要が困ったように首を傾げる。

「クロストメティア…？聞いたことない名前なんですけど。」

「クロストメティア。高原に咲く紫色の小さな花で、ある病気の治療薬に使う花だな。身内が病気なのか？」

順司の問いに、漣は悲しげにうなだれた。

「自分の母さん…元々病気がちなんだが…最近、また倒れちまったんだ。それで投薬しようにも、その病気に使う薬は、保存がきかないんだ。だから、病人が出る度に新しく作らないといけないってわけだ。」

「そう…なんだね。わかった…依頼受けるよ。オーナーも陸斗も異論は無いよね？」

要が確認するように聞いて、

「ま、いいんじゃねえの？」

「断る理由は無えわな。」

陸斗も順司も同意した。

「受けるのは構わねえんだけど…」

「“けど”何なの、陸斗？」

「クロストメティアは高原にあるんだよな？外国ならともかく、日本に…それもこの辺にあるのかよ？」

「……どうなんだろう？」

要が答えを求めるような眼差しで順司を見たが、順司もさあと首をひねるだけだった。

「確かに高原はこの辺りには無い。」

「えっ…」

「だが、珍しい花を集めている収集家が居ると聞いたことがある。そいつと上手く交渉できれば…一本ぐらいは手に入るだろう。」

漣の提案に、なるほどど要は手を打った。

「収集家？どこに居るんだよ、そいつ。」

「…この辺りに居るとしかわからねえんだよ。だから、あんた達に助けを求めた。」

「…ふうん。これで大体のことは把握したな。収集家を探せばいいんだよな？」

確認するように陸斗が聞いて、漣がこくっと頷く。

「うっし。善は急げ、だ。行くぜ、要、陸斗。」

順司は誘いかけるように言ったかと思うと、二人の返事を待たずに外へ出て行く。

「ん…了解っす。」

続いて、陸斗も事務所から出て行く。

「待ってよ、オーナー！陸斗！…あ、鬼怒川さんは、事務所で待ってて…」

「自分も行く。」

要が言葉を言い終わらない内に、仏頂面の漣が言った。

「えっ！？だけど…危ないかもしれないですよ！その収集家って人

がいい人とも限らないし…。」

「…自分は鬼怒川流格闘術の黒帯を持っている。付いていっても、足手まといにはならないはずだ。それに…母さんのために、自分も何かしたいんだ。」

「鬼怒川さん…。わかりました。無理はしないで下さいね。何かあったら、私達が守りますから！」

「…守る必要は無えんだけど。それから…」

漣はそこで一度言葉を止めた。

「何ですか？」

「“漣”でいい。敬語も必要無い。自分はまだ17だ。恐らく、あんたと同い年ぐらい…」

「17歳なんですか！？意外…いえ、驚きました。私は16なので、一つ下ですね。」

要は一人納得したように、うんうんと頷いていた。

「あ…また敬語使っちゃった…ごめんなさ…いや、ごめん。漣君がいいって言うなら、これからはそう呼ぶね。私のことも“要”でいいよ。」

「要…な。改めてよろしく。」

照れたように、うつむいて頬をかく漣を見て、要はクスッと笑った。

それから二人は、順司達の後を急いで追ったのだった。

珍しい花の収集家は、話を皆まで聞かず、首を横に振った。

三十代前半ぐらいの黒髪の女性だった。

彼女の家は、色とりどりの花で埋め尽くされていた。

いずれも、めったに見ることができない非常に珍しい花であった。

花壇にも、栽培中の花のつるが見受けられた。

「人の命を助けるためなんです！一本だけ…」

懇願するように要は言ったが、収集家はダメですと返すだけであった。

「クロストメティアは、高原に咲く花の中でも最も珍しい花なのです。ある特定の高原にしか咲かず、一年に十本咲くかどうかわからないほどなのです。その中の貴重な一本を手放すことはできません。」

「だけど…！」

「…どうしてもと言うならば、取引をしましょう。」

「取引？」

要が尋ねて、そうですと収集家が答える。

陸斗と順司は、話がややこしくなると厄介ということで、外で待機していた。

漣は、要の隣に座ってじっと押し黙っていた。

ケンカっ早い自分は、話し合いには向かないと自覚していたからである。

「…ペリルラビリンスという場所がありますよね？そこには、クロストメティアの価値に匹敵するほど貴重な花があるのです。それと交換ならば…一本だけ差し上げても構いません。」

「本当ですか！？」

「はい。取ってきていただきたいのは、ハピカという漆黒の花です。茎の長さは三十センチほどで、花の真ん中には白い小さな玉が付いています。別名“死神の花”ともいいます。」

「死神の花って…取ってきて大丈夫なのか？」

漣が自問自答するように小声で言った。

「漆黒の花であることから、その別名が付いたにすぎません。問題は無いでしょう。ただ…」

「ただ…何ですか？」

「私も実際に見たことはありません。人伝に聞いただけですので、生えている正確な場所がわからないのです。そういうわけですので、あなた方が得意な探しものとして探していただこうというわけです。」

収集家は、にこりと笑って話を締めくくった。

「で…話はついたのか？」

収集家の家から出た二人を見て、順司が訊いた。

「うん…取引しようだって。ペリルラビリンスに咲く“ハピカ”…“死神の花”と。」

「死神の花、か。うさんくせえな…。」

要の報告を受けての、陸斗の呟き。

「疑ってみたところで何も出ない。とにかく、ペリルラビリンスに行ってみるとするか。」

順司が言って、

「そうですね。」

「…了解っす。」

「自分も行くからな。」

要、陸斗、漣の三人も同意して、彼らはペリルラビリンスに向かった。

同日、ペリルラビリンス西側入り口にて。

「な…何、これ！？」

要は思わず大声を出してしまった。

「…滅茶苦茶だな。」

「暴力団でも入ったのかよ…？」

順司と陸斗は、唖然としていた。

「花なんか咲いてるのか？」

漣は、ペリルラビリンスのことは何も気にせず、ハピカの心配をしていた。

彼らが見たペリルラビリンスは、過去に見たものと大きく異なっていた。

壁だらけの狭い路地だったそこは、地震で崩壊したかのように瓦礫と人間の山だった。

壁はボロボロに崩れ、無傷な人間は誰一人として居なかった。

かろうじて死者は出ていないようだが、動くことは儘ならないようだった。

「一体、誰がこんなことを…？」

「おや、まだ生き残りが居たんだ…？」

要の声に答えるように、瓦礫と人の山の後ろから三人の人間が現れ

た。

「あたい達の包囲をかいくぐって無事でいるなんて…なかなかやるねぇ、あんた達。」

無造作にはねた紫髪を持つ女性が言った。

瞳は緑色で、歳は二十代後半から三十代前半ほど。

ゴスロリ調のドレスとブーツが印象的だ。

「羅実亜(らみあ)…、彼らは今し方ここに来たように見えますよ。僕達“壊し屋”の包囲をかいくぐったわけではありません。」

「そうかい、邸津(ていっ)？残念だねぇ…骨のある奴と戦えると思ったのにさぁ。」

邸津と呼ばれた人物は、白くさらさらの短い髪を持つ黒縁メガネをかけた青年。

歳は十代後半…要達と同じくらいに見える。

「彼ら…刻の事務所の連中だな。油断は禁物だ。」

「強いんだろうねぇ？せっかくなら、あたい達を楽しませてくれないと戦い甲斐が無いさぁ。ねえ、趨都（すうと）？」

趨都と呼ばれた人物は、赤く長い髪を持つ女性。

黒いジャケットにカーゴパンツ。

一見すると男性に見えるが、全体的に丸みを帯びていることから、女性とわかる。

「時には危険な依頼もこなしてきたとの風評がある。…あなどれない相手だ。」

趨都は冷静に考察して言った。

「趨都がそう言うんなら、少しは戦い甲斐がありそうだねぃ。早速、コロシアムタイムを…って、何やってんだい…あんた達！」

羅美亜は思わず、怒鳴りかけてしまった。

探し屋の面々は、話を全く聞いている気配は無く、キョロキョロと辺りを見回していたからである。

「漆黒の花…漆黒の花…っと。これか…？」

陸斗が近くで見つけた黒い花を摘み取って訊いて、

「うーん…たぶん、それじゃないの？他に花なんて見当たらないし。」

要がそれに答える。

「人の話は最後まで…」

「意外と簡単に見つかるものなんだな。もっと時間がかかると思ったのだが…驚きだ。」

羅美亜の話をスルーし、漣が拍子抜けしたような調子で言った。

「もうここに用は無いな。帰るぜ、陸斗、要、それから…依頼人。」

「呼びすてでいい。依頼人という言い方は抽象的すぎて何かしっくり来ない。」

「…ちょいとあんた達。わざとあたい達のこと無視してないかい？」

羅美亜が控えめかつ、静かな怒りを含んだ調子で言った。

邸津と趨都は、探し屋のほのぼのした調子に言葉も出ない様子だった。

「んー…おまえら、何か用？」

「普通、こういう時は、『罪も無い人や建物を壊しやがって…。俺達探し屋が成敗してやる！』とか言うもんじゃないのかい！？なんで、ゆったり談笑して帰ろうとしてんのさ！？」

あー、そういうもんなんだと、陸斗はやる気無さげに返した。

「無視したわけじゃないんですけど…。私達、急いでいるから…またの機会じゃダメですか？」

要はひどく申し訳無さそうに、眉を下げて訊いた。

「だーかーら！そうじゃなくてさぁ…！！」

「…羅美亜。彼らには何を言っても無駄のようですよ。闘志や正義感というものを全く感じられませんから。」

邸津が探し屋の心理を読んだように言った。

それに答えるように、

「俺達は、ただの探し屋。別に正義の味方になりたいわけじゃねえし。…むしろ、そっちの方が正義だろ。」

陸斗が言った。

「あ、あたい達が正義…？」

「…確かに陸斗の言う通りだな。ペリルラビリンスを壊したことは、ここいらの住民にとっちゃあ有難いことのはずだ。」

「うんうん。私達も余計な戦いしなくてよかったし、ハピカも見つけやすくなったし！有難う、正義の壊し屋さん達！」

「あたい達が正義の味方……。」

要や順司の言葉を受けて、羅美亜の顔は照れたように真っ赤になった。

『正義の壊し屋バンザーイ！』

『やあ、あなたが壊し屋の看板娘の羅美亜さんですね？僕とデートでもいかがですか…？』

羅美亜の頭の中では、壊し屋が多くの人に感謝されている情景が浮かんでいた。

「……亜、羅美亜！」

「はっ…！？な、なんだい、邸津。」

「…彼らが逃げてしまいますよ。」

しかし、邸津に呼びかけられ、羅美亜は空想から現実へと引き戻された。

ふと見ると、探し屋の面々は、もう数十メートルも先を歩いていた。

「なっ…あたしをぽうっとさせて、逃げるなんて…！なんて、ズルい奴らだい！戦わないのかい、腰抜けー！」

「ん…賑やけえな。」

羅美亜の叫びを背中に受けながら、両耳を塞いだ陸斗が言った。

「急いでいるからって、無視しちゃって良かったのかな…？ものす

ごく怒ってるみたいだけど。」

「もし、本気で戦いたかったなら、後ろからでも攻撃してくるだろうよ。」

「…オーナー。さりげなく怖いこと言わないで下さいよ。」

「ははっ。まあ…細かいことは気にするな。」

嘆き口調で言う要に、順司は豪快な笑いで答えた。

「趨都…邸津。なんで、あいつらを追いかけないんだい！？あたいは今日ほど酷い屈辱を受けたのは初めてだよ！！すぐにでもあいつらを…」

「羅美亜。今日は止めておこう。雨が降りそうだからね。」

「雨？…ああ、そうだったねい。ちっ…命拾いしたねぃ、探し屋。だけど、次は必ず…！」

趨都に諭され、羅美亜は仕方なく身を引いたのだった…。

「これは…まさしく、死神の花…ハピカですね。素晴らしい美しさです！」

花の収集家は、感激したように言葉の語尾の調子を上げた。

「ああ…ペリルラビリンスから取ってきた。約束だ…クロストメティアを譲ってほしい。」

「…いいでしょう。これがあなた方の欲する花…クロストメティアです。」

漣の手に、クロストメティアがそっと載せられた。

よほど大事にされていたようで、花びらは宝石のようにつやつや輝いていた。

「これがクロストメティアなんだ…。きれい…！」

「…感謝する。それでは、急ぐので失礼する。」

「有難うございました！」

去って行こうとする漣と要を、お待ち下さいと収集家が引き止めた。

「はい？何ですか？」

「…何だよ？」

振り返る二人に、収集家は優しい笑顔を向けた。

「私は、収集家と共に占いも少々やっています。ハピカのお礼に、占い的観点から一つアドバイスをしましょう。まず…雪森　要さん。」

「はい。」

「あなたは…心に迷いが無く今の仕事をとても楽しんでいるようですね。しかし、慣れてきたためか、横柄で自己中心的な態度をとりがちです。謙虚な姿勢も忘れないように注意して下さいね。」

「うっ…当たってる…。気を付けます…。」

要は、自己中心的と言われたのがショックだったらしく、少し傾いでいた。

「次に…鬼怒川　漣さん。」

「……おう。」

「あなたは…武術的観点から見れば強いですね。ですが、本当の強さというものが何なのかをわかっておらず、大きな悩みを抱えている…。自分自身をありのまま受け入れ、その壁を乗り越えることが大切ですよ。」

「そんなことは…自分自身がよくわかっている。」

漣は、怒ったようにふいと顔を逸らして歩き始めた。

「はあ…。あ…ありがとうございました。」

要は収集家に軽く一礼して、漣の後を追った。

二人の姿が見えなくなってから、

「青春っていいものですね…。私もあと数歳若ければ…」

収集家は、羨むような調子で一人呟いた。

翌日、九時四十一分、刻一とき一の事務所。

ピンポーンとチャイムが響き渡った。

「はーい。」

居間でくつろいでいた要が、玄関へ走って行きドアを開けると、漣が立っていた。

「この間は…世話になった。依頼料を払いに来た。」

「あ…うん！とにかく、中に入って。陸斗もオーナーもリビングでテレビ見てるから。」

要に誘われ、漣はリビングに移動した。

「おっ…来たな。」

「ん…一日ぶり。」

順司と陸斗は待っていたかのように、それぞれ言葉を返した。

立ち話も何なので、要と漣は近くのイスに腰掛けた。

「それで、依頼料の話だが…いくらだと提示されなかったので、勝手に用意した。これだけあれば…足りるか？」

透き通ったガラスのテーブルに、一万円札の札束がドンッと置かれる。

…ざっと見ても、三十万円分はある。

「こ、こんなに…！？も、もらっちゃっていいの…？」

要は目を見開いて、札束を見ていた。

「少ないくらいかと思ったんだが。母さんの命の恩人だからな。」

「あ…そっか。お母さんの具合はどう？」

「薬が効いたようで、今朝は調子が良いみたいだ。久々にあんな笑顔を見れた。」

そう返す漣の顔は、前日よりも穏やかだった。

「漣…悪ぃが、そんなに依頼料は受け取れねえよ。その一割分でいい。」

「な…なんでだ？自分の家は貧乏ではない。そのくらいの金額…」

「あとの九割は、これから嵩むだろう母親の治療費にでも残しておけ。」

順司は、ふうと煙を吐きながら言った。

「だが…」

「ん…順司さんの気が変わらない内に、しまったほうがいいぜ。」

「う、うん…私もそう思う。ちょっともったいない気もするけど…。」

陸斗と要に助言され、それなら…と漣は三万円だけテーブルに残し、他は財布にしまった。

「じゃあ…依頼料三万円、受け取りました！また、ご贔屓に…」

「待て。俺の話はまだ終わってないぞ？」

話を締めくくろうとした要の言葉を遮り、順司が言った。

「漣…おまえもここで働くか？」

「なっ…？」

漣は面食らったような顔をした。

自分が言おうとしていたことを先に言われてしまったからである。

「オーナー…」

「順司さん…」

「要と陸斗は黙っとけ。…どうするか、漣？」

漣は順司から目を逸らして、何でわかったんだよと小さな声で訊いた。

「簡単なことじゃねえか。依頼料の支払いを今日まで引き伸ばしたかと思えば、その旅行並に多い荷物。家出か、ここに住む準備としか思えねえからな。」

順司は、苦笑しながら答える。

「そうなの…漣君？」

「……ああ。別にあんた達が良ければ、だが。あの収集家に言われたことを、昨日ずっと考えていた。そして、出した結論がここで働くことだ。」

「…言葉、省きすぎじゃねえ？」

陸斗が突っ込んだが、漣はそれには答えなかった。

「と、とにかく…俺はあんた達と探し屋をやっていれば、本当の強さってのがわかりそうな気がする。それに…ここには要が居るから。」

「えっ？」

「な、何でもねえよ！その…あんた達がいいなら俺は…」

「…漣。今日の食事当番はおまえだ。」

順司が断言するように言って、陸斗もよろしくと気の無い頼み方をした。

「それはつまり…」

「これから同じ仕事仲間としてよろしくね、漣君！あ、料理当番は順番制だから、気楽に考えてくれていいよ。」

要も微笑みながら、改めて挨拶したのだった。

こうして、漣という新しい仲間を加え、探し屋のほのぼのライフは続くのである…。

―続く―

Ａｂｓｅｎｃｅ－留守番組の一日－

ガタンゴトン…ガタンゴトン…と、電車の稼働音が一定のリズムを刻んでいる。

陸斗は、手に取った缶コーヒーを一気にぐっと飲み干し、ぷはっと息を吐き出した。

「…電車内での缶コーヒーは特別っすね、順司さん。」

「全くだ。風呂上がりの牛乳並に旨い。」

同じく缶コーヒーを飲みながら、順司が言葉を返す。

窓から見える景色は、正に田舎の定番とも言える光景。

一面の水田と長く連なった山である。

「ん…順司さんと二人で旅行するのも半年ぶりっすね。いつも通り、温泉旅行っすか？」

「いや…今回は、神社巡りだ。最近、宝くじの当選率が低くなってきたからな。神頼みをしようかと考えた。」

「神社巡り…。」

陸斗は言葉を繰り返し、ぼうっと外を眺めた。

空は青く澄み渡り、風は微かに水田の稲を揺らす。

いつになく風流な気持ちになって、鼻歌を歌いたくなる朝だった…

……。

「『陸斗と二人で旅行に行って来る。留守番頼む』…って、また置いてきぼりなんだ…。」

リビングのガラステーブルの上にあるメモを読んで、要はため息混じりに言った。

今朝は妙に静かで、薄々こんなことだろうとは気付いていた。

しかし、次こそは自分も連れて行ってもらえるだろうと思っていただけに、要のショックは相当大きかった。

（私は今回も留守番なんだね…。まあ…嘆いてても仕方ないけど。）

「今日は…要だけなのか？」

「わっ！？」

不意に近くから声をかけられ、驚くあまりに要はドタッと尻餅をついた。

「痛たた…。」

「す、すまない…。大丈夫か？」

謝りながら手を差し伸べてきたのは、漣だった。

申し訳なさそうに眉を下げ、要を見つめている。

「あ、ありがとう…。」

要は漣の手に掴まり、よいしょと腰を上げた。

「本当に…すまない。何度もチャイムを押したのだが…応答が無く、けれど声はするものだから、勝手に入って来てしまった。万が一、強盗などであったら倒した方がいいかと思ったゆえ。」

「こっちこそ…ごめんね。考え事してたから、チャイムの音聞こえなかったんだ。」

「まあ…無事なら構わない。それより…先ほど訊いたが…八代内オーナーと溌は？」

不思議そうに辺りを見回す漣に、これ…と要はメモを見せた。

「……自由な二人だな。」

漣は呆れたような顔をして、素直な感想を述べた。

「昔っからこうなんだよね…、順司さんと陸斗って。」

「昔…？そんなに長く一緒に居るのか？」

「うーん…長くはないんだけど。私がこの事務所に来た時からって言うのが正しかったかな。」

要は左手人差し指をを顎の下に当て、思い出すように言った。

「そういえば…要は何がきっかけで、いつからここで働いているんだ？」

ふと思い立って、漣が尋ねる。

「今から数えて…十ヶ月前になるかな。最初は…ただ、依頼に来ただけだったんだ。だけど…まあ…いろいろあって、ここで働くことにしたんだ。」

「いろいろあって…か。差し支えなければ…聞かせてもらえないか？」

「えっ？」

要は面食らったように目を見開いていたが、やがて…いいよと快く承諾した。

「とりあえず座ろうよ、漣君。立ち話はきついから。」

「ああ…それもそうだよな。」

要に促され、漣はソファにゆっくりと腰掛けた。

彼の右隣に要も座る。

「テレビは消しとくね。」

要はリモコンを使って、テレビの電源をピッ…と切った。

「さて…と。なんだか緊張する…。私がここに来たばかりのことを誰かに話すのは初めてだから。」

（自分は違う意味で少し緊張しているが…。）

漣は要の顔を横目で見つめながら思った。

二人の距離は、髪が触れ合ってしまうぐらいの近さだった。

漣の頬が仄かに赤みを帯びる。

「私が陸斗とオーナーに依頼した物は…オルゴールなんだ。おばあちゃんの形見で、大事にしていたんだけど…盗まれちゃって。」

「盗まれた…？」

「うん…。私の家に泥棒が入って…。なぜかそのオルゴールだけ盗まれちゃったの。お金は全然取られてなかったのに…だよ？」

「それは…奇妙だな。」

漣は両腕を組んで、首を傾げた。

「…だよね？犯人は全く見当もつかなかったし、近所の人の目撃情報も無くて…仕方ないって諦めかけてた。だけど、事件は思わぬところから、解決の糸口が見つかったのだ！」

要は目を輝かせて、ミステリー番組のアナウンサーのように言った。

「思わぬところ…？」

「…そう。あれは…泥棒が入って一週間が経った頃。私のオルゴールがテレビに出ていたの。とある美術館の新しい目玉として！」

「……！」

漣は目をパチパチと瞬いて、驚きを示した。

「…驚いた？私もその番組を見た時は思わず叫んじゃったよ。」

「ああ、それは驚くな。つまり…美術館の関係者が犯人だったということか？」

「うん。今の漣君と同じことを考えた私は、場所がわかってるなら取り返さなくちゃって思ったの。だけど、一人じゃ危険だし不可能に近かった。そんな時、町を歩いてたらたまたまここの看板が目について、それで陸斗とオーナーの二人に依頼したんだよ。」

要は、二人ともあの頃から全く変わってないんだよと苦笑した。

「…なるほど。」

「事務所に入った途端、二人からのナンパ攻撃だよ？こっちは真剣なのに…って頭に来ちゃったから、足蹴を食らわしておいたの。そうしたら…なんか気に入られちゃって。」

「……？」

漣は、話の流れを飲み込めなかったようで、不思議そうな顔をした。

「私にもよくわからないんだ。『依頼料はタダにしてやる。代わりにここで働け。』って一方的にオーナーに言われたんだよ。どうしようかって迷ってたら、『仕事が終わってから答えを聞かせろ。』って補足されたよ。」

「それで…八代内オーナーと溌は、要の依頼をこなし、まんまと要を探し屋に引き込んだのか。…強引なやり口だな。」

「うん、まったくだよ！でも…探し屋になれて良かったなって今では思ってるよ。あっ…オーナーと陸斗には内緒ね。」

要は、右手人差し指を鼻の前に立てていたずらっ子っぽく言った。

「あ、ああ…もちろんだ。二人の…秘密ってことだな。」

漣は照れたようにうつむいて言葉を返した。

「うん！その時の二人の活躍は、また今度話すね。依頼が来たみたいだから。」

要はそう言って、ソファからスッと立ち上がった。

玄関のチャイムが、もう三回も鳴っていたからだ。

「私、出て来るね。」

漣が、ああと頷いたのを確認して、要は玄関へと駆けていく。

そして、ゆっくりとドアを開ける。

「すみません、お待たせして…。ご依頼ですね、中へどうぞ。」

依頼人より先に会話を切り出し、要は応接室へと案内する。

（自分も行くか。）

廊下を歩いていく二人の姿を見ながら、漣も応接室へ急いだ。

要と漣の前の椅子に腰を下ろしたのは、栗色の髪を後頭部でおだんごヘアにした女性だった。

「初めまして。私の名前は有那田　可奈美（ありなた　かなみ）。モダンクイーンというファッション会社で、コーディネーターとして働いているんだ。あ、これ…名刺ね。」

依頼人…可奈美は、名刺を差し出しながら気さくに言った。

「モダンクイーンって…あの有名なファッション会社のですか！？」

「まあ、有名といえば有名だね。」

「ファッション会社…か。」

興奮気味な要とは反対に、漣はあまり興味が無いようで名刺もチラッと見ただけだった。

「あっ…私は雪森　要です。それから彼が…」

「鬼怒川　漣。」

漣はぶっきらぼうに挨拶をした。

「へえ…若いのに、凄腕の探し屋なんてやるね、君達。」

「本当はあと二人居るんですけど…、ちょっと旅行に行っちゃってて…すみません。」

「謝らなくていいよ。依頼さえこなしてくれるなら、人数や年なん

て関係ないしさ。」

可奈美は、苦笑しながらフォローするように言った。

「それで依頼なんだけど…」

「は、はい。」

「探してほしいのは、今度のファッションショーで使うドレスさ。」

可奈美は、依頼の説明と共に一枚の写真をテーブルの上に置いた。

フリルだらけでピンク色の派手なドレスだった。

「ファッションショー…？失礼ですが、これを着るモデルの名前は？」

「菜花　明日香（なばな　あすか）さんだよ。若者向けファッション雑誌ルルモの専属モデル。」

「な、菜花明日香さん！？本当ですか！？」

要は目をキラキラ輝かせて、声を張り上げた。

（ファッション雑誌…。少し残念だが、会話に入れないな。）

そう思った漣は、黙って二人の会話を聞いている。

「本当だよ。ルルモ…読んでるの？」

「はい！毎月欠かさず読んでますよ！それに…菜花明日香さんのファッション、私も参考にしてるんです！」

「そうなんだ。今回の依頼人は、私じゃなくて…明日香さんなんだ。」

可奈美は、にっこり笑って言った。

明日香のファンが目の前に居ることが、自分のことのように嬉しいようだ。

「…探すって、単に無くしただけなのか、盗まれたのか？」

自問自答するように、漣が言った。

「たぶん…盗まれたんだよ。あんな大事にしていたドレスを無くすわけないからさ。」

「盗まれた…って、盗難事件じゃないですか！警察には知らせたんですか？」

要の問いにダメだったよと、可奈美が首を振る。

「ダメだったって…」

「連続傷害事件。ほら、まだ犯人見つかってないだろ？あれの捜査で忙しいって、取り合ってもらえなかった。ま、警察なんて、最初から当てにしてないけどね。」

「それで…ここに依頼しに来たのか。」

漣が確認するように、一人呟いた。

「そう。ここなら絶対に安心だって、とある筋から聞いてね。…そういうわけだから、早速来てもらっていいかな？」

可奈美が訊いて、

「はい、いいですよ。」

「…構わないが。」

要と漣は快くそれを受けた。

それから、可奈美の車で三人はモダンクイーンへと向かったのだった…。

チャリンと音を立て、五円玉は賽銭箱の中へ落ちていった。

「……。」

それを見届け、順司は無言で両手を合わせ祈る。

「順司さん…五円玉じゃ安すぎるんじゃないっすか？」

自分は五十円玉を賽銭箱に投げながら、陸斗が今更の質問をする。

「……。」

「…順司さん？」

「腹…減ったな。」

順司は陸斗の質問には答えず、ぽつりと呟いた。

「…話、聞いてたっすか？」

「ああ…五円玉がなんだ？」

「いや…そうっすね。腹減りましたね。」

陸斗は特に怒る様子も無く、順司と話を合わせる。

自分自身もマイペースなので、怒ったところで全く説得力が無いということを、陸斗はよく理解していたのだった。

「飯にするか。ラーメンとうどん、どっちにするか？」

「二択なんっすか。俺…焼きそばが食べたいんすけど。」

「なら、焼きそばでいいか。」

他愛ない話をぽつぽつとしながら、順司と陸斗は焼きそば屋を探し

歩いていくのだった。

ファッション会社、モダンクイーンにて。

「依頼を受けていただいて、本当に感謝しています。」

明日香は、優しげな微笑を浮かべ一礼した。

茶色い髪を高く結い上げ、青いカラーコンタクトを入れた瞳は魅惑的に輝いている。

ファッションモデルというだけあって、要がぼうっと見とれてしまうほど抜群の着こなしである。

「い、いえ！こ、こちらこそ、依頼していただき感謝しています！」

要は緊張しすぎて、体はカチカチに固まり、声は少々裏返ってしまった。

（大丈夫なのか…要？）

漣は心配そうにそんな彼女を見つめている。

「可奈美さんから聞いたかと思いますが、依頼品はドレスです。あなた方も忙しくて大変でしょうが、どうか明後日のショーまでに探して来ていただきたいのです。」

「は、はい！ぜ、全力を尽くして探してみせます！」

「…頑張るのもいいけど、リラックスした方がいいよ。働く前に疲れるからさ。」

可奈美に突っ込まれ、要は恥ずかしそうにうつむいて押し黙った。

「探すのは構わないんだが、大体の心当たりが無ければ…」

「心当たりならあります。」

漣の視線と、姿勢を正し真剣な目つきをした明日香の視線がピタリと合う。

「私の最有力ライバル候補と言われる鹿子　鈴那（かのこ　すずな）さんという方が居ます。先月のショーで、彼女と少々トラブルを起こしてしまって…もしかしたら、私のことを恨んでいるかもしれません。」

「トラブル…？」

「…はい。故意ではないとはいえ、彼女の出演するはずだった番組に私が代役として出演してしまったのです。彼女…前日に顔にケガを負ってしまって…。モデルは、顔が命ですからケガをした顔のまま出演することはできなかったのです。」

漣は、腕組みをしてふーむと考え込むように、息を吐いた。

「それが、鹿子の勝手な勘違いなんだよ。明日香さんは関係無いのにさ…”事故を仕組んだ張本人は明日香だ”なんて、吹聴して…いい迷惑だよ！」

可奈美はその時の悔しさを思い出したようで、両手でバンッと激しく机を叩いた。

紙コップの中のスポーツ飲料が、ピチャと音を立て、机に数滴の滴を落とす。

「うーん…それだけで、鹿子さんが盗んだと決めつけるには…」

「鹿子が盗んだに決まってるよ！急に壊し屋を雇ったなんて噂もあるしさ！」

「壊し屋？…って、やっぱり…」

「…あいつらだろうな。」

要と漣は困ったように眉を下げて、顔を見合わせる。

「私も同じモデル仲間を疑いたくないんですけれど…他には心当たりは無いことですし…無くしたとも考えられないので。成功報酬は…二人分で２０万円お支払いします。」

「絶対に…成功させてみせます！」

明日香の悲しそうな顔を見て安心させる言葉だが、報酬にもちょっと釣られたというのが本心な要だった。

午後１６時０２分、ファッション会社セレブティマダムス。

鹿子の部屋には、三人の客人が高級そうなソファーに座っていた。

「…もう一度聞くけどさぁ、あたい達にこんなつまらないことさせる気かい、あんた？」

ソファの右端に座っていたゴスロリ服の女性が口元をひきつらせて尋ねる。

「羅美亜…慎みなさい。これも立派な依頼ですよ。」

左端に座っているメガネをかけた男性が女性をたしなめる。

「どこが立派なんだい、邸津！あたい達は壊し屋なんだよ、壊し屋！それがなんでドレスを捨てるなんて仕事…」

「あら、私の依頼を断るっていうの？こんな大金を用意させといて、今更断われるわけはないわよ？」

顔は笑っているが、依頼人…鹿子鈴那の口調は威圧的だった。

「大金が何だっていう…」

「鹿子様の言う通り。羅美亜…いい歳こいた大人なんだから駄々をこねるのは止めときな。」

「失礼だねぃ、趨都！！いい歳って…あたいはまだ若いよ！」

「若いって…。」

ソファの真ん中に座った女性…趨都は、何と返そうかと、困ったように苦笑いした。

「何だい、その笑みは！あたいは、もう賞味期限切れだとでも言いたいのかい！？」

「ふっ…」

「しれっと笑うな、邸津！！」

邸津は、ごまかすようにこほんと一つ咳払いをした。

「羅美亜…その話はこの際どうでもいいことでしょう。どんな依頼でも、私情は挟まず達成させる…それが僕達のモットーだということを忘れたのですか？」

「忘れちゃいないけどさぁ…」

「選り好みはできませんよ、プロとして。」

羅美亜を諭し終え、邸津は鹿子に視線を戻す。

「失礼しました…依頼人さん。喜んで依頼を受けましょう。」

「ふん…当然よ。この私からの依頼なんだから、有り難く思いなさいよ。」

「なっ…！何様なん…」

「羅美亜。数秒黙っていて下さい。」

厳しい目つきで言われ、羅美亜はムッとした顔で口を閉じる。

「どこに捨てるかはこちらに任せる、と。それでいいんですね？」

「そうよ。明日香が見当も付けられないような場所に捨ててくれればいいわ。」

「では、契約成立ということで。」

そう締めくくると、趨都と邸津は今にも噛みつきそうな顔の羅美亜を連れその場を後にするのだった。

「あー！腹立つよ！！」

外に出た羅美亜は、忌々しげに近くの空き缶を思い切り蹴飛ばした。

カーンと高い音を立て、空き缶はゴミ入れの中に落ちる。

「まあまあ、羅美亜。腹が立っているのは、私も邸津も同じなんだから。」

「そんなこと、信じられやしないよ！あそこまで言われて、あたい達の仕事を安く見られて…。ムカつくったらありゃしない！！」

「仕方ないよ、これが仕事なんだからさ。」

宥めすかす趨都の横で、邸津は無言で眼鏡を拭いていた。

「仕事だからって、許せることと許せないことがあるだろぃ！！邸津…あんたも何とか言ったらどうだい！？」

「…探し屋。」

「はっ？」

「今回の仕事では、探し屋も働くそうです。この間の借りが返せますね。」

脈絡の無い言葉を発した邸津に、どういう意味だいと羅美亜が訊く。

「羅美亜。依頼人の理不尽な対応への怒りは、目前の戦闘に向けてしまうのが最善策なのですよ。…この静かながら激しい怒り…探し屋を消し去りたい気分です。」

「邸津…あんた、見た目通り腹黒いんだねぃ…。」

「見た目通り、は余計ですよ。」

邸津は穏やかな笑顔を羅美亜に向けたが、左手の拳は筋が浮き出るほど固く握られていたのだった。

「ううっ…？」

「どうしたんだ、要？」

セレブリティマダムスの表口から少し離れた噴水裏。

全身をブルッと奮わせた要に、漣が尋ねる。

「いや、なんだか寒気がして…。風邪…かな？」

「大丈夫か？無理はしない方がいい。」

「たぶん大丈夫…だと思う。それはいいんだけど…どうやって潜入しよう？」

要は表口に立っている二人の見張りを見つめたまま訊いた。

見張りの二人は、サングラスをしっかりかけ表口の両端で周りに目を光らせている。

「見張りは二人…。正面突破するか、裏口から不意打ちするか…？」

「裏口って言っても…こう人目が多くちゃバレちゃうよね。はあ…陸斗が居たら良かったのになあ。」

要は、こんな時に旅行してんだから使えないなあと嘆いた。

「溌…？」

「あっ、漣君には話してなかったね…。帰ったら話すよ。私達の特別な力をさ。」

「…ああ。」

「また話反れちゃったね。それでどうしようかな…んっ？」

「…おっ？」

漣と要の二人は、同時に表口の自動ドアに視線を移した。

「あれって…」

「確か…壊し屋とかいう三人じゃなかったか？」

漣が言って、要がたぶんと答えた。

「鹿子鈴那さんの依頼…受けたのかな？」

「…あのビルから出て来たということは、十中八九間違いないだろうな。だが、あからさますぎる。罠かもしれないな…。」

「うーん…じゃあ、後を追いかけて罠なんか張れないような場所で問い詰めてみようか？」

要の提案に、

「それがいいな。」

漣も同意し、二人は壊し屋三人の後をそっと着いて行くのだった。

「首尾はどうかな、邸津？」

運転席の趨都が訊いて、

「上々です。探し屋は、バイクで僕達の後を付かず離れずの距離で追ってきています。」

後部座席の邸津が後ろを向いたまま答える。

彼の両手には、双眼鏡がしっかりと携えられていた。

「しかし、妙だねぃ…。」

「何が妙なのさ、羅美亜？」

「ペリルラビリンスで会った時は、四人居たはず…。今日は、二人しか居ないよぉ…？」

羅美亜の疑問に、旅行にでも行っているのではないでしょうかと邸津が答える。

「旅行…。本当にそうだとしたら、随分自由な職業なんだろうね、探し屋って。」

「ま、あたい達にとっては好都合なんだけどねぃ。」

羅美亜はそう言って、ニヤリと不敵に笑ったのだった。

三十分後、人気(ひとけ)の少ない公園にて。

「漣君。気付かれてたみたいだね、私達の尾行…。」

「ああ…。戦うしかないようだな。」

公園の近くに車を止めた壊し屋達の様子を見て、漣と要もバイクから降りた。

そして、砂場を通って壊し屋の前まで歩いた。

「久しぶりだねぃ、探し屋！あの時、あたい達をコケにした借りを返させてもらうよ！」

羅美亜は、ピッと人差し指を突きつけて宣言した。

「そういうことです。今日は…絶好の洗濯日和ですしね。」

「邸津…。それ、主婦っぽいよ。“快晴”って言えばいいじゃないか。」

邸津と趨都の二人は、やや漫才調で言った。

「あの時は急いでただけで、コケにしたわけじゃないんだけど。」

「急いでたら無視していいってもんじゃないよ！覚悟しなっ！！」

言葉と同時に、羅美亜は瞬間的に要の目前に移動した。

「は、早い…！」

「この前のようには行かないよ…豪炎叩！！」

羅美亜は手に持った双鎚を激しく振り下ろす。

その瞬間、

「きゃっ！！」

要の足元の地面から炎の竜巻が吹き出した。

要は驚いて、後ろへ飛び退く。

…靴の先端とズボンの裾が、少々黒く焦げていた。

「要っ！」

「彼女の心配をしている場合ですか？」

その声でハッと我に返り、振り返り身構える。

いつの間にか、邸津は漣の背後に立っていた。

「敵に背後をとらせるなんて、初歩ミスですね。ファーストコイン…氷風！」

邸津は、金色のコインをポケットから取り出し上に投げる。

すると、

「……っ！？」

コインを核とした空間から、凄まじい風と何本ものつららが現れ漣に向かって来る。

技を出す暇も無く顔を覆うしかできなかった漣の服を、つららはあちこち破いていく。

「漣君…！わっ！？」

「あんたの相手は、あたいだっての！」

駆け寄ろうとする要の足元の地面を、羅美亜は双鎚で砕く。

要はよろめき、ドッと地面に倒れた。

「いたた…。」

「とどめだよ！火飛薙！！」

羅美亜は彼女の前の空間を横に薙ぎ払う。

双鎚は、静電気のような火花を散らし、要に直撃…

「降魔ベルセブブ！！」

…しなかった。

「なっ…うあっ！？」

突如、要の周りにブワッと強風が起こる。

羅美亜は後方へと吹き飛ばされ、大木にドッと背中をぶつけた。

「……っう。」

「今のは五月雨払いだ。人間…我に抗おうなどとは、百年早いわ。」

ベルセブブを降魔させた要は、見下ろすような目線から言った。

瞳は青く視線は冷たい。

「我はベルセブブ。愚かなる人間よ…我の名をその胸にとくと刻むがよい。五月雨払い！！」

要は右腕を横に振り払う。

すると、その腕から豪風が起こり、羅美亜に向かって行く。

「うあああっ！？」

「羅美亜！！」

バシッ！

羅美亜にぶつかる直前、趨都は蹴鞠のような玉を風に向かって蹴った。

それは、風の軌道を右に大きく逸らし、羅美亜から遠ざけた。

「…我に対抗できる人間が居たか。」

要に降魔されたベルセブブは、感心するようにホウと息を漏らす。

「…三対二なんてフェアじゃないから手を出さないつもりだったけど、羅美亜を傷つけるなら話は別さ。」

そう言って、趨都は再び鞠を要に向かって蹴る。

要は、スッと右に避けた。

「ふっ…趨都とか言ったか。お前とはまた戦いたいものだ。」

満足げに笑うと、フッと要の体からベルセブブは離れたようだった。

要の瞳は黒色に戻り、彼女本来の性格に戻る。

「あっ…降魔時間、切れちゃったか。」

困ったように苦笑いし、頬をかいて彼女は言った。

「くっ…よくもあたいをこんな目に…！絶対許さ…」

「今日は退くよ、羅美亜。」

体を起こし身構える羅美亜に、趨都が言った。

羅美亜は、えっ…と面くらったように体を退け反らせる。

「待ってくれよ、趨都！あたいはまだ戦え…」

「…そうですね。大将がここまでやられては、あがくのは妥当では

ありません。」

「邸津まで…！嫌だからな、あたいは！この悪魔女を倒す…あ、何するんだい！」

邸津と趨都は、わめく羅美亜の右腕をぐいと強引に引っ張り数歩退く。

そして、

「今回はこちらの負け。ドレスは返すよ。また…次の仕事で。」

「羅美亜が回復したら、その時は遠慮なく戦いますので、では。」

ドレスをブランコにかけ、あっさりと去って行ってしまった。

あまりの退きの良さに、要と漣はただただ唖然としてしまった。

「…何だったんだろう、あの人達？」

「さあ…な？とにかく、ドレスは戻って来たのだから問題は無いのだが。」

「うん…そうだね。ドレスが汚れたりしてないか、チェックしてみよう。」

そう言って、ドレスをそっと両手で持った直後、要は大変と叫んだ。

「どうした、要！？」

「…裾が破けてる。ベルセブブの五月雨払いの時かもしれない。」

「なっ…本当か？」

慌てて駆け寄り、漣もドレスの裾に視線を移す。

…要の言葉通り、ドレスの裾はハサミで切ったかのように派手に破れていた。

「これは…誤魔化せないな。」

「どうしよう…？明日香さん…がっかりするよね…。」

「…縫うしかないな。自分がやってみよう。」

「……へっ？縫うって…ドレスを？漣君が！？」

唐突な漣の申し出に、要は素っ頓狂な声を上げた。

「…そんなに意外か？自分が裁縫することが。」

「う、うん…ちょっとね。格闘やってる人って、手とかゴツゴツしてるイメージがあったから。」

「世間一般のイメージではそうらしいが…例外というものもある。…話しすぎたな。今はドレスをくつろうことを優先しよう。」

漣が言って、要もそうだったねと同意する。

「先にモダンクイーンに戻ろうよ。明日香さんに事情を話さないといけないし。」

「ああ。報告…連絡…相談の法則だな。」

「……？何の法則かわかんないけど、そうだね。」

滑ったかと恥ずかしげにうつむく漣を連れて、要はモダンクイーンへと足を速めるのだった。

同日、午後五時五分。

「…こんなものでどうだ？」

漣はドレスを明日香に手渡しながら言った。

「…素晴らしい出来です。これならば、明日のショーで使えます…良かった。」

明日香はドレスを大事そうに抱えながら、微笑みを浮かべていた。

「えっ…明後日じゃなかったんですか？」

「スポンサーから電話があって、急遽明日になったんだよ。君達に言いそびれたから、間に合わないんじゃないかって冷や冷やしたよ…。」

要の質問に可奈美が答える。

「ええ。ズタズタになったドレスを見た時は、びっくりしましたけど…漣さんでしたよね？あなたのおかげで助かりました。本当にありがとう。」

「礼を言われるほどでもない。自分達のせいなのだから、当然のことをしたまでた。」

「自分達…というか、私のせいなんだけどね。ごめん…漣君。」

うなだれた要を見て、明日香が気にしないでくださいとフォローした。

「ドレスが戻ってくれば、それでいいんですから。」

「それにさ…ドレスを盗んだ犯人の鹿子は、食あたりでショーに出れなくなったって。」

可奈美は、いい気味だよと、鼻をフンと鳴らす。

「そうなんですか…。因果応報ってやつですね。」

「まったくだな。」

顔を見合わせる要と漣。

明日香が、そういえば報酬がまだでしたね…と話を切り出す。

「可奈美さん、報酬を。」

「はい、二人で二十万。きっちり渡したから。」

給料袋に入った報酬が、要の手に渡される。

要の瞳がキラキラと輝いた。

「まいどありがとうございます！また何かあればよろしくお願いします。」

「では…自分達は帰るか。」

可奈美と明日香の見送りを受けながら、漣達二人はモダンクイーンを後にするのだった。

同日午後七時二十分、刻の事務所。

「ういっす…今、帰ったぞ。」

「ん…飯は？」

順司と陸斗が帰って来た。

「オーナー、陸斗！おかえり。」

「…帰ってきたか。」

リビングでテレビを見ていた要と漣が言葉を返す。

「…ただいま。飯作ってないの？」

「ふらっと旅行行って帰って来た人のご飯なんて無いよ！まったく…もう。」

「じゃ、ちょうど良かった。」

何がちょうど良かったのよと腰に両手を当てて訊く要の前で、陸斗はごそごそとバックから何かを取り出した。

要がよく見てみると、それは焼き鳥のようだった。

「これ…買ってきたから。腹減ってるなら食べれば？」

「そうそう。今日はごちそうだ。俺も刺身を買って来たからな。」

陸斗が焼き鳥を出したのを見て、順司もビニール袋から刺身を取り出す。

「…ご馳走？」

「要にとっては、ってこった。なあ、要…」

「焼き鳥に刺身！ご飯炊いてるから、早く食べよう！！」

順司の言葉を最後まで聞かずに、要は笑顔を浮かべて台所へ走っていった。

「…早えな、要。」

「……。」

陸斗は冷めた瞳でテーブルに刺身と焼き鳥を置いていたが、漣は呆れたような困ったような笑みを浮かべていたのだった。

―続く―

Ａ　ｓｔａｒｔ－きっかけの事件－

「要ー、夕飯は？」

「腹減った…。」

「今、できますから！ちょっと待っててて下さいよ…。」

日曜日の夕方。

ソファと椅子にだらりと座った順司と陸斗に、要が言葉を返す。

右手にはおたま、左手には火傷防止のミトンをはめている。

料理中の要をチラと見て、陸斗はそういえば…と切り出す。

「あー？なんだ、陸斗。」

「要がこの事務所に来てから、もう十ヶ月も経ったんすよね…。」

「ああ…そういや、そんくらい経ったな。おてんばのガキと思ってたが…すっかり馴染んじまいやがってよ。」

順司は、ハハッと苦笑していた。

「ちょっと…私の話で何を笑っているんですか！」

台所から要のツッコミが飛んで来たが、順司と陸斗は二人で盛り上がっている。

「依頼品は、ばあさんの形見のオルゴールだったよな。」

「そうっしたね。しっかし…順司さん、一体依頼料はいくらくらいと考えんすか？まだ、要返しきてれてないってことは、相当…」

「初めて来た時かあ…。」

二人の雑談を聞きながら、要も懐かしそうに目を細めるのだった…。

十ヶ月前。

「どうしよう…？」

雪森　　要は、今にも泣きそうな顔で床に座り込んでいた。

（机の引き出しも…タンスの中も…ベッドの下も…全部探した。だけど…無いんだ、やっぱり。）

「はあ…。」

深いため息が自然と漏れてくる。

と、その時。

「要…こんなに部屋を散らかしちゃって！…まだ探していたのね、おばあちゃんのオルゴール。」

不意にドアが開き、彼女の母親が入ってきた。

「お母さん…。」

「…無くなっちゃった物は仕方ないのよ。逆に言えば、オルゴールだけで済んだのは良かった方よ。」

「だけど…あれは、おばあちゃんの形見で私の宝物…」

「要！…泥棒が入ったのは、もう一週間も前よ。もし部屋にあるなら…とっくに見つかってるわ。諦めなさい。」

悲しそうに眉を下げている要に冷たく言い放つと、母親は部屋から出て行った。

「諦めが肝心なのかな…はあ。」

一人残された要はポツリと呟き、せめてもの気分転換に…と、テレビの電源を点ける。

テレビでは、女性アナウンサーがあるニュースを放送していた。

『…ご覧の通り、萌芽美術館は例年に無い賑わいを見せております。』

萌芽美術館に新しい展示品が並べられて、大人気だというものだった。

画面には、その名前の通り、萌芽のような形の屋根をした美術館と大勢の客が映っている。

「萌芽美術館に新しい展示…か。一体何…」

『その新しい展示品ですが、かなりの年代物のオルゴールだとか。館長さんにインタビューしてみましょう。館長の古谷さーん！』

要の質問に答えたかのようなタイミングで、アナウンサーが言った。

『はい、何ですか？』

『このオルゴール…三億円の価値があるとお聞きしましたが、どこで見つけられたんですか？』

「……あー！あのオルゴール…まさか…！？」

アナウンサーが手にしているオルゴールを指差して、要は思わず叫んでしまった。

それは、小さなオレンジ色の屋根の家の中で二人の少女が手を繋ぎ合っているというものだった。

館長がネジを回すと、アメージンググレイスがゆっくりと流れ始める。

（間違いない…おばあちゃんのオルゴールだ！でも、なんで美術館に…？）

『…うなんですよ。質屋で安く売られているのを買い取って、学者に調べてもらったというわけです。』

要の気持ちを全く知る由もない館長は、得意げにコメントしていた。

「質屋…？それも安く売られていた？」

要はテレビを消し、すくっと立ち上がる。

そして、

「…ふざけないでよ！！」

ドカッと音がほど思い切り、ビニールのサンドバッグを蹴り飛ばしたのだった…。

アナウンサーが手にしているオルゴールを指差して、要は思わず叫んでしまった。

それは、小さなオレンジ色の屋根の家の中で二人の少女が手を繋ぎ合っているというものだった。

館長がネジを回すと、アメージンググレイスがゆっくりと流れ始める。

（間違いない…おばあちゃんのオルゴールだ！でも、なんで美術館に…？）

『…うなんですよ。質屋で安く売られているのを買い取って、学者に調べてもらったというわけです。』

要の気持ちを全く知る由もない館長は、得意げにコメントしていた。

「質屋…？それも安く売られていた？」

要はテレビを消し、すくっと立ち上がる。

そして、

「…ふざけないでよ！！」

ドカッと音がするほど思い切り、ビニールのサンドバッグを蹴り飛ばしたのだった…。

同日、午後三時。

とある建物の前に要は立っていた。

（ここが…“刻の事務所”か。）

ふらふら街を歩いていたら見つけた看板に書かれていた住所。

それが“刻の事務所”…日本に一つしかない探し屋の事務所だった。

こぢんまりとした事務所で、ドアの上に名前が書かれている以外は、目立った宣伝はされていない。

（なんか廃れてるなあ…。そもそも…なんで、“刻の事務所”なんだろう？“探し屋の事務所”でいいじゃんか。）

様々な想いを抱きつつも、要はチャイムを押した。

ピンポーンという単調なリズムが響く。

……返事も物音も聞こえない。

（留守…なのかな？）

要は首を傾げつつ、すみませーんと声をかけた。

……やはり、返事は無い。

ドアをそっと触ってみると、鍵はかかっていないようでキイ…と軋む音がした。

（不用心だなあ…なんだか不安になってきたんだけど。）

そんな想いを胸の内にしまいながら、要はゆっくりとドアを開けた。

すると、

「若くて美しいレイディ。ようこそ、刻一とき一の事務所へ。」

「き…きゃあああ！？」

目の前に、青年の顔があり要は思わずへたり込んだ。

「人の顔見て…いきなり悲鳴上げることは無えだろ。」

青年は、クセ毛だらけの緑色の髪をかきながら、呆れたように言った。

瞳は、透き通った茶色だ。

「あ…えっ…ご、ごめんなさい。」

「……ま、別にいいけど。ほら、手出しな。」

要は、ありがとうと礼を言いながら青年の手に掴まって立ち上がった。

「陸斗ー！依頼人…女の子だったか？」

青年は陸斗という名前らしい。

彼は、事務所の奥から聞こえた声に、そうっすよーと答えながら、要を応接室へと案内した。

応接室の椅子にちょこんと座った要は、キョロキョロと部屋を見回していた。

シャンデリアに、ふかふかの社長イス…檜の香りがする本棚に、ピカピカの床…。

事務所というより、カフェに近い装飾である。

要の前のソファには、先ほどの青年とタバコを口にくわえた男性が座っていた。

「ほう…依頼人はかわいいお嬢ちゃんか。仕事が終わったら、美味しいコーヒーでも一杯飲みに行くかい？」

開口一番、陸斗の隣に座っていた男性はナンパ口調で言った。

ボサボサの黒髪と紫色の瞳が特徴的で、口調の割には若く見えた。

恐らく、三十代前後であろう。

「えっ…まだ依頼内容すら話してないんですけど…」

「ん…順司さんと行くのに気が乗らないなら、俺とイタリアンレストランでも行く？」

悪乗りしているのか本気なのか、陸斗もにこっと笑って誘いかけた。

要は、二人の軽薄な態度にムッとする。

「私…あなた達みたいなナンパ男、大嫌いなんです！真面目に聞いて下さい！！」

ガバッと立ち上がり、二人に向かって右足を振り上げる要。

「うおっと。」

順司というらしい男性は、パシッ…と左手で器用に蹴りを受け止めた。

「…気に入ったぜ、嬢ちゃん。」

「きゃっ！？」

急に足から手を離され、要は順司に倒れかかる。

「依頼料はタダにしてやる。そん代わり…この事務所で働きな。」

順司は、要の体を引き寄せてそう耳打ちした。

「えっ…！？」

「ま、それが嫌なら、現金でも俺は構わないがな。」

イスに無理矢理座り直させられ、要はぽかんとしていた。

「……？順司さん、何を話したんすか？」

「なあに…依頼料の相談をしただけだ。」

「ふうん…俺に秘密にするほど、高額の依頼料なんすね。」

陸斗は怪訝そうな顔をしていたが、それ以上は順司に追及しなかった。

「…さて、本題に入るとすっか。嬢ちゃん…依頼内容を話してみな。」

「あっ…は、はい！」

ぼうっとしていた要は、順司の一言で我に返り、話し始めた。

「探してほしいものは…おばあちゃんのオルゴールなんです。正確に言うと…取り返してほしいものは、なんですけど。」

「…俺達、探偵でも警察でも無えんだけど。」

「うっ…で、でも！プロの探し屋なんですよね…？だったら、美術館からオルゴールを取り返すぐらい簡単なんじゃ…」

「だから、取り返すのは俺達の仕事じゃないって言ってんの。場所がわかるなら、自分で取り返せばいいじゃんか。」

必死な要と反対に、陸斗の態度はかなり投げやりだった。

あくまでも、“探しものを見つける”という仕事しかしたくないようである。

「…ちょいと待ちな、嬢ちゃん。美術館から取り返す…それはどういう意味だ？館長に取り上げられちまったのか？」

順司はタバコを灰皿に突っ込みながら、眉を潜めて尋ねる。

「盗まれちゃったんですよ！犯人の姿は見てないし、私のものだっていう証明もできないけど…テレビに出てたんです…。おばあちゃんがプレゼントしてくれたものにそっくりなオルゴールが、萌芽美術館の新しい展示品として…。」

「萌芽美術館ねえ…。…そういうことなら、探しものじゃなくても依頼として受けてやるよ。」

「へっ？」

美術館の名前を聞いて、急に了解した陸斗の態度に要は拍子抜けしてしまった。

「なんで急に…？」

「…実は、二日前にも萌芽美術館で探しものをする依頼を受けてな。ついで…で良けりゃ受けてやるって、陸斗はそう言いたいんだろう。」

順司が代弁して答えた。

「ついでって…」

「嫌なら、断る。自分で取り返せばいいだろ。」

「わ…わかりましたよ！ついででも何でも構わないから、オルゴールを取り返して下さい！」

要が承知したことを見届け、陸斗はニヤッとほくそ笑んだ。

同日二十一時、萌芽美術館裏口前。

空は灰色の雲に覆われ、フクロウの鳴き声だけが響いている。

美術館から漏れる光に照らされ、茂みに三人の人物の姿を確認でき

る。

「…なんで、依頼人のあんたまで付いてくるんだよ？」

「あなた達二人ともやる気なさげで心配だからです！今更だけど、自分で行った方が早いと思ったし…。」

「まあ、いいじゃねえか、陸斗。人数は多いに越したことは無えよ。」

陸斗、要、順司の三人である。

「ん…まあ、順司さんがそう言うなら構わないっすけど。」

「自分の身を自分で守れる自信があるだろうから、付いてきたんだろうからな。」

そう言って、不適な笑みを浮かべる順司。

要は、見下されているような気持ちになって、ムッと口を尖らせた。

「もちろんですよ。私のことは守ってもらわなくていいですから！」

「…ふうん、度胸だけはあるみてえだな、あんた。」

「“だけ”は余計ですよ！…それはともかく、どうやって潜入する気ですか？手薄とはいえ、警備員がしっかり見張ってるのに…。」

要の質問に、正面突破するに決まってんだろと陸斗が返す。

「正面突破って…本気なんですか！？」

「ん…もちろん。早速始めていいっすか、順司さん？」

「おう…いつでもいいぜ、陸斗。」

順司の同意を受けた陸斗は、ポケットから小さな砂時計を一つ取り出す。

そして、

「時の守護者マテリエルよ…我に力を貸さんことを！」

呪文のように呟いて、砂時計をクルッとひっくり返す。

その瞬間、辺りの騒音がピタリと止み、裏口ドアに立っている警備員も人形のように身動きしなくなった。

「こ、これは、一体…？」

要は左手を口に当て、信じられないというように目を丸くしていた。

「時間を止めたんだよ…三分間だけな。ぼやっとしてないで、潜入するぜ。」

「いや、そんな…まさか！だって、漫画じゃあるまいし、人間がそんなことできるわけ…」

「三分間だって言ったろ？質問は後から受けるから、早くしろよ！」

「あ、ちょっと…押さないでよー！」

陸斗は要の訴えを無視し、無理矢理彼女の手を引いて走り出した。

中の電気はまだ点いているとはいえ、外は真っ暗だ。

夜の美術館は、なんともいえないほど異様な空気を醸し出している。

閉館時間ちょうどであるため、中には客や警備員の姿は見えなかった。

「明るいけど…彫像とかは目が光ってて不気味だよね…。」

要は口元をひきつらせながら、ぽつりと呟いた。

「ん…別に。」

「そんなこたぁ、二の次だぜ、嬢ちゃん。それより…お前さんの大事なオルゴールとやらを探さねえと。」

陸斗と順司は依頼されたことにしか興味が無いようで、淡々と言葉を返す。

「うう…見かけはそうでもないけど、さすがプロの探し屋…。動じてないし、堂々としてるよ…。」

「あんたこそ何をそんなに怖がってんだよ？彫像は動いたりしねえし、真っ暗ってわけでもねえのに。」

「わかってますけど…時間止めて正面突破してる非現実的な状況があるので、有り得ないことでも普通に起こりそうで。」

「非現実的？…どこがだよ？」

「…だから！今、言ったじゃないですかって…あっ！」

突っ込みを入れようとした要の瞳に、何かが映った。

「ん？どうしたよ、嬢ちゃん？」

「あれ…私のオルゴールです！」

「……ほう。あれか。」

タバコの煙をスパーと吐きながら、順司も要が指差す方向に視線を写す。

四角いガラスのショーケースの中に、二人の少女が手を繋ぎ合ったオルゴールが入れられていた。

下には赤いクッションのようなものが敷かれ、ケースには小さな鍵穴がついている。

…貴重な展示品だけあって、とても丁重に扱われていることが一目で分かる。

「…って、こんな時に何やってるんですか！第一、こういう場所は禁煙ですよ！！」

「さすがにオルゴールは、灰皿にはならねえよな…。」

「な…何、変なこと言ってるんですか！！…とにかく、早くオルゴールを取り出さないと！」

あらかたのツッコミを終え、要はショーケースにタッと駆け寄る。

そして、力任せにケースのドアを引っ張る。

「うーん！やあっ！とりゃ！…ダメかあ。」

「あんたこそ何やってんだよ…。」

陸斗が冷めた瞳を向け呆れ気味に言った。

「鍵が無いから仕方ないじゃないですか！早くしないと三分経っちゃうし…。」

「鍵ならここにあるぞ。俺と陸斗が探してた物もな。」

「えっ…」

「あっ…」

順司の右手に携えられた鍵と“探しもの”を見つめ、要と陸斗は目を丸くしていた。

「な…なんで八代内さんが鍵を…？ここ、セキュリティ抜群でそんなに簡単に持って来れるわけないのに！それに、保管場所だってわからないんじゃ…」

「読心術って知ってっか、お嬢ちゃん？」

「ど、読心術…？それくらい、知ってますよ！」

順司の唐突な質問に、やや混乱気味に要は答える。

「つまり…そういうこった。説明は後回しだ。」

「何が“つまり”なんですか！気になるじゃないですか…。」

「…わかんねえ奴だな、あんた。説明してる時間は無えって言っただろうが。」

順司はやや投げやりに言葉を返し、オルゴールが入ったガラスケースに歩み寄る。

そして、カチャカチャと鍵穴を鍵でいじり始めた。

「順司さん…手に持ってるのは本当に“あれ”なんっすか？」

陸斗が順司に近づき、彼が携えた物に視線を向けて尋ねる。

「ああ…まず間違いないだろうよ。金庫から取って来たからな。」

「金庫から…？会話に入らなかったほんの二十秒ほどで、ですか！？」

「金庫の在処さえわかりゃ、あとは開けるだけ…それだけの時間があれば十分だ。…っと、開いたぜ、お嬢ちゃん。」

カチャリ…と、鍵の開く音が要の耳にも聞こえてきた。

順司は、開いたガラスケースの中からオルゴールを取り出し、要に手渡す。

「ほらよ、お嬢ちゃんの大事なもんだろ？」

「あ…ありがとうございます！」

「それから…“こいつ”は陸斗が持っててくれ。」

続いて、順司は陸斗に二人の“探しもの”を渡す。

「ん…預っときま…」

「そこまでだ、こそ泥達め！」

陸斗の返事を遮り、三人以外の誰かが言った。

振り返った要達の目に映ったのは、二人のガードマン…美術館裏口に立っていた者達だった。

明かりはあるというのに、雰囲気を出すためか、手に携えた懐中電灯の光を三人に向けている。

「手を上げて大人しくしていろ！さもなければ…」

「ま…待って下さい！これはその…私は…自分のオルゴールを返してもらいに来ただけなんです！」

要は両手を前に出して左右に振りながら訴えるが、ガードマンは聞く気はないようだ。

「話は署の警察官が聞いてくれるだろう！いいから大人しく…」

「な、何事ですか、これは！」

「あ…館長！」

館長と呼ばれた男性は、表口のドアから駆け足で入って来た。

「館長…泥棒です！我々の警備のスキをついて、あの三人がオルゴールを！」

「な、何ですと…！？」

警備員の報告に、館長は一大事といわないばかりに目を丸くして驚いた。

「おうおう…親玉のお出ましってわけか。」

「だ、だから、禁煙ですってば！！」

二本目のタバコの煙を吐きながらニヤリと笑う順司に、要が大声で注意する。

「そのオルゴールを返しなさい！さもなければ…痛い目に合いますよ！」

「…このデータは、要らねえの？」

「そ…それも返しなさい！！警備員…小癪な彼らに目にもの見せてやりなさい！！」

陸斗がピラッと見せた紙を見て、館長は逆上したようにわめいた。

「了解しました、館長！！」

「覚悟しろ！！」

命令を受け、二人の警備員が警棒を振り上げてワッ…と三人に襲いかかる。

「はあっ！！」

二人の警備員の内、一人は陸斗に向かっていった。

細長い警棒が陸斗の頭に直撃…

「ふうん…一般人にしちゃ、なかなかやるじゃん。」

「なっ…！？」

…しなかった。

陸斗が懐から出した木の棒に、弾き返されたのである。

警棒は床に落ち、カランカランという乾いた音を立てた。

「弾いただと…！？」

「…でも、速さが足りねえな。とうっ！」

「があっ！！」

陸斗の強烈な一撃が、警備員の鳩尾を突く。

警備員はフラフラと三歩ほどよろめくと、そのままドッと床に倒れた。

「…つまんねえの。」

「わっ！？」

「おっと！」

陸斗の呟きとほぼ同時に、要と順司が驚いたような声を上げた。

二人が直前まで立っていた場所の真中の床を、もう一人の警備員の警棒が叩いていたのだ。

「あ、危ないじゃないですか！警備員が一般市民に暴力振るっていいと…」

「こそ泥は一般市民ではない！！」

「やっ！？」

要の訴えを最後まで聞かずに、ベテランの警備員は警棒を激しくもう一度振り下ろす。

足元を打たれ、要はドテッと床に尻餅をついた。

「痛たっ…。」

「女性を傷つけたくはないが…観念しな、お嬢ちゃん！」

勝ち誇った顔をした警備員が警棒を振り下ろしたその時。

パーンと銃声が響いた。

「うあっ！？」

直後に、警備員は左足を押さえて座り込んだ。

膝の部分に、丸く焦げたような跡がついている。

「や、八代内さん！？」

「嬢ちゃんは嬢ちゃんでも、その子は依頼人だからな。手は出させねえぜ。」

順司は硝煙を上げる銃の銃口を天井に向け、ふっとその煙を吹く。

「き、君達…わかっているのか！不法侵入に…盗難…銃刀法違反ですぞ！」

館長は完全に腰が引けていたが、精一杯の大声で三人に言った。

陸斗は、面倒くさそうに顔だけそちらに向ける。

「…だから、何だよ？」

「わ、私が通報すれば…君達は一生牢屋の中ですぞ！わ、わかったら、大人しく手を上げて…」

「あんたこそわかってんのかよ？俺がこのデータを持ってる限り、あんたも牢屋行きだってこと。なんたって…この美術館は盗品で成り立ってる証拠なんだからな。」

「うぐっ…！」

痛い所を突かれたというように、館長は押し黙る。

「今の話…本当なんですか？」

「おう、本当だ。俺と陸斗は、他の依頼人からその証拠を探すよう頼まれていたからな。しかも…だ。その依頼人は、警察関係者だぜ？」

要と順司の会話を聞き、見る見る内に館長の顔が青くなっていく。

「き、君達！取引しようじゃないか！君達のことは見逃そう…代わりに、そのデータを置いていってくれないだろうか？わ、悪くはない条件だろう？」

「ん…順司さん次第で。」

陸斗の視線が順司に移る。

順司の視線も陸斗に移り、二人の視線がピタリと合った。

（今だ…！）

館長は、隙ありとばかりに展示品の中から手裏剣を取り出し、ヒュヒュッと投げつける。

「あ…八代内さん！滝さん！危ない！！」

「うおっと…！」

「んっ…！？」

間一髪。

要の叫びで館長の行動に気付いた二人は、ひょいとそれぞれ左右に手裏剣を避けた。

「やってくれんじゃねえか…。」

「交渉決裂だな…こりゃ。」

チャッ…ジャキ…。

「ひっ…！」

銃を構えた順司と、棒を胸の前に構えた陸斗を見て、館長は後ずさる。

「たああっ！」

「はっ！！」

「ひあああっ！？」

銃声と鈍い叩音、そして館長の悲鳴が響き…やがてそれはすぐに消えた。

翌日、午前九時三十分、刻の事務所応接室にて。

「一日ぶりだな、お嬢ちゃん。」

順司は、ブラックコーヒーをすすりながら話しかけた。

「そうですね…八代内さん、溌さん。」

膝に両手を置いて、要は二人の名を呼ぶ。

陸斗は特に興味が無いのか、ソファによたれかかって雑誌を読んでいた。

「それで…どうするか決めたのか、お嬢ちゃん？」

「お嬢ちゃんは止めて下さいよ！私には…要って名前があるんですから。」

「それがお嬢ちゃんの答えってわけだな。…刻の事務所にようこそ、要。歓迎するぜ。」

要の返答に、順司は満足げにニッと笑って言った。

「…今回の報酬は、じゃじゃ馬娘っと。」

誰にも聞こえないような小さな小さな声で陸斗が呟いた。

―続く―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4768f/

刻-とき-の事務所

2010年10月9日01時47分発行